ISSN 0918-1946

調査年報 5

平成4年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

調査年報 5

平成4年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

目　次

平成４年度の調査 …… 2
1　調査の概要 …… 2
2　調査遺跡 …… 5
美々７遺跡 …… 5
美々８遺跡 …… 7
美々８遺跡（低湿部） …… 11
ユカンボシＥ５遺跡 …… 19
中野Ａ遺跡 …… 23
中野Ｂ遺跡 …… 27
茂別遺跡 …… 33
（仮称）国立療養所裏２遺跡 …… 39
滝里 11 遺跡 …… 44
滝里 32 遺跡 …… 45
滝里 33 遺跡 …… 47
オサツ２遺跡 …… 49
北明１遺跡 …… 54
西昭和２遺跡 …… 57
十日川５遺跡 …… 59
3　研修・研究会等 …… 64
4　組織と機構 …… 66

凡　例

・「2　調査遺跡」で遺跡名の後に付した（　　）内は、北海道教育委員会の埋蔵文化財包蔵地登載番号である。

・各遺跡の位置図は、それぞれ国土地理院発行の２万５千分の１あるいは５万分の１図を複製または縮小利用したものである。

平成4年度の調査

1　調査の概要

今年度は、道内9ヵ所の市町において計14遺跡の発掘調査を実施した。このうち半数の7遺跡は昨年度以前からの継続調査、ほかは新たに発掘調査に入った遺跡である。総発掘面積は58,000 m²あまりになる。

昭和51年度から北海道教育委員会により始まった新千歳空港建設に伴う発掘調査は、昭和54年9月から当センターが引継ぎ現在に至っている。本年度は2ヵ所の遺跡について調査を実施した。美々7遺跡では昨年度に続き、縄文時代早期の土壙墓から幼児の足型が付いた土製品がみつかっている。平成2年度から調査を続けてきた美々8遺跡のうち美沢川左岸の低湿部では、物送り場や舟付場など遺構の発見が相次ぎ、擦文時代からアイヌ文化期の舟材や漁労具など多数の木製品が出土している。低湿部の現地調査は今回で終了したが、出土遺物の整理および保存処理にはあと数年を要する計画である。

昨年度に引き続いて行われた、恵庭バイパス建設に伴うユカンボシE5遺跡の調査は今年度で終了。縄文時代中期の竪穴住居跡やTピットなどが発掘されたほか、早期および中期の遺物が多数出土している。

芦別市の滝里ダム建設に伴う遺跡調査は4年度目となる。今回は空知川右岸の低位段丘面に立地する3ヵ所の遺跡を調査して、おもに縄文時代晩期の遺構、遺物を検出した。このうち滝里33遺跡では、土壙からコハク玉が約900点検出されている。原石の産地については現在、分析中である。このダム建設に伴う遺跡の調査は今後も継続される予定である。

昨年度から発掘に入った茂別遺跡では、2ヵ年度の調査で続縄文時代恵山文化の時期の竪穴住居跡や配石墓のほか、幅20 mにおよぶ大規模な濠が発掘された。出土遺物は恵山式土器など46万点におよんでいる。本遺跡の調査は来年度も行われる予定であるが、遺物整理にはさらに数年かかる見込みである。

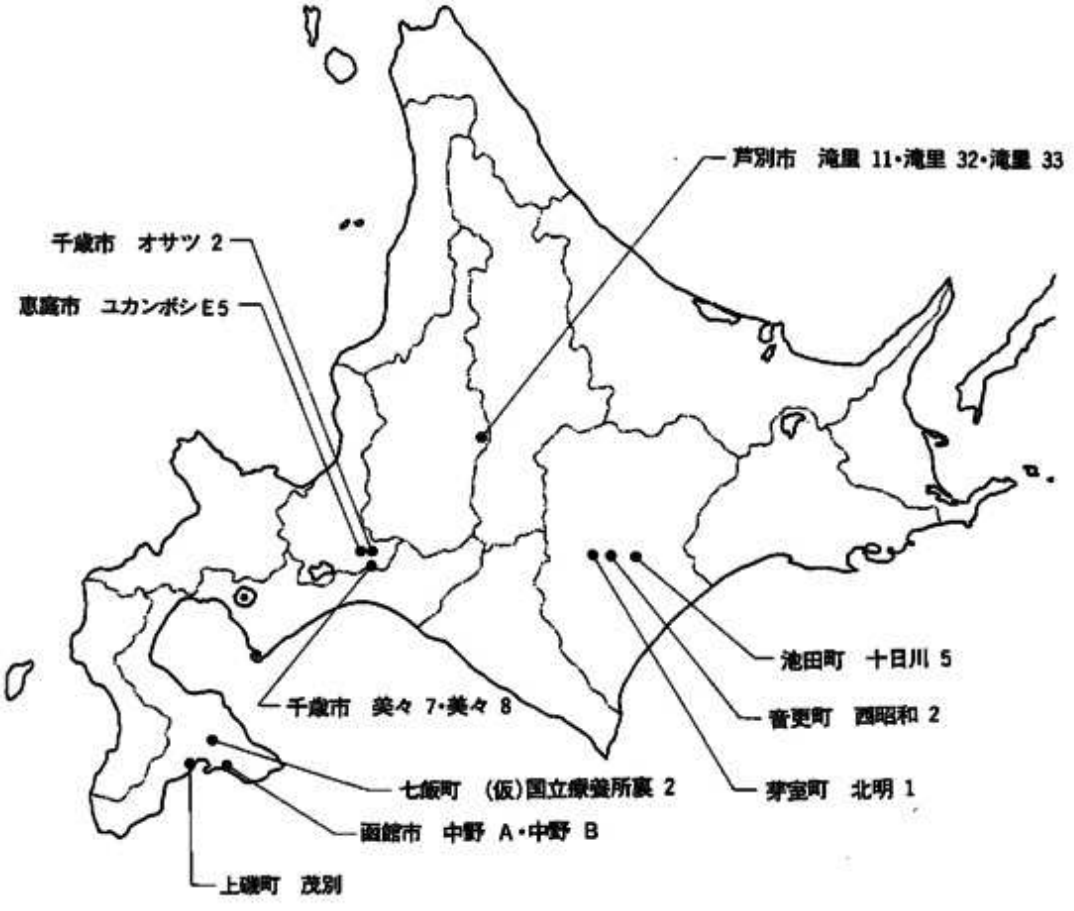
函館新道工事に伴う遺跡調査は、昭和60年度から3ヵ所の遺跡で実施されたが、今年度は七重町で新たに発見された国立療養所裏2遺跡(仮称)で調査が行われた。縄文時代中期の遺構、遺物が発掘されたほか、土偶、石棒などもみつかっている。来年度は隣接する遺跡主体部の調査が予定されている。

函館空港拡張工事に伴い、昨年度から調査に入った中野A遺跡は今年度で発掘を終了したが、新たに隣接する中野B遺跡の調査が開始された。両者とも昭和50年代初め、函館市教育委員会の調査により縄文時代早期の集落跡と大量の遺物が発掘され、注目を集めた遺跡である。今回の調査では、中野A遺跡で貝殻文土器や春日町式土器を伴う竪穴住居跡が合わせて40軒あまり、中野B遺跡では住吉町式土器やムシリI式土器を伴う竪穴住居跡が計約150軒検出された。このほかにも多くの遺構と遺物が発見されており、当時の集落の変遷をたどることが可

能になるものと思われる。中野B遺跡の調査は、来年度以降も継続される予定である。

平成2年度から始まった北海道横断自動車道建設工事用地のうち、清水町から池田町に至る区間の遺跡調査は、今年度発掘した3ヵ所で終了となる。音更町の西昭和2遺跡では黒曜石の槍先などが100点あまりまとまって発見された。池田町の十日川5遺跡では縄文時代中期の竪穴住居跡や多くの土壙とともに、モコト式土器の良好な資料が出土している。

道営畑地帯改良事業に伴い、今年度初めて調査を行った千歳市のオサツ2遺跡は、以前から知られた擦文時代の集落跡である。今回の調査では竪穴住居跡のほか、続縄文時代の墓など多数の遺構が発掘された。旧長都川右岸にあたる低湿地では、舟の櫂など擦文時代からアイヌ文化期の木製品が多数発見された。本遺跡の調査は来年度も行われる予定である。



平成4年度 調査遺跡の位置

平成4年度調査一覧

遺跡名	所在地	調査面積(m²)	関連工事（調査委託者）	備考
美々 7	千歳市	1,547	新千歳空港建設（札幌開発建設部）	昭和55,平成3年度調査
美々 8	〃	8,758		昭和56,57,60,62,平成1,2,3年度調査
〃（低湿部）	〃	2,011		平成2,3年度調査
ユカンボシE5	恵庭市	3,482	恵庭バイパス建設（札幌開発建設部）	平成3年度調査
中野 A	函館市	8,500	函館空港拡張工事（函館開発建設部）	平成3年度調査
中野 B	〃	3,550		新規調査、継続
茂別	上磯町	1,660	国道防災工事（函館開発建設部）	平成3年度調査、継続
（仮称）国立療養所裏2	七重町	2,925	函館新道工事（函館開発建設部）	新規調査、継続
滝里 11	芦別市	1,300	滝里ダム建設（石狩川開発建設部）	新規調査、継続
滝里 32	〃	4,060		平成3年度調査
滝里 33	〃	7,400		新規調査
オサツ 2	千歳市	870	畑総土地改良事業（石狩支庁）	新規調査、継続
北明 1	芽室町	7,200	北海道横断自動車道（日本道路公団）	平成3年度調査
西昭和 2	音更町	2,510		新規調査
十日川 5	池田町	2,470		新規調査
計		58,243 m²		

2　調査遺跡

美々7遺跡（A－03－95）

事 業 名：新千歳空港建設用地内埋蔵文化財発掘調査

委 託 者：北海道開発局札幌開発建設部

所 在 地：千歳市美々1714

調査面積：1,547 m²

発掘期間：平成4年5月6日～6月5日

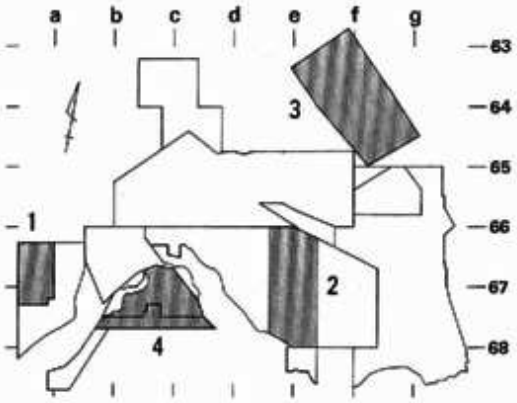
調 査 員：千葉英一、佐藤和雄、三浦正人、田口　尚、皆川洋一、越田雅司、鈴木　信

遺跡の概要

本遺跡の調査は昭和53、55、平成3年度に続く4回目で、今回をもってすべて終了した。本年度は舌状台地の西側縁辺部から緩斜面にかけて（標高17～22 m）の調査を実施した。この区域の表土層と第Ⅰ黒色土層は、昨年度に調査を行い報告済みである。今回は第Ⅱ黒色土層を対象に発掘を行い、縄文時代早期を主体とする遺構、遺物を検出した。

遺構と遺物

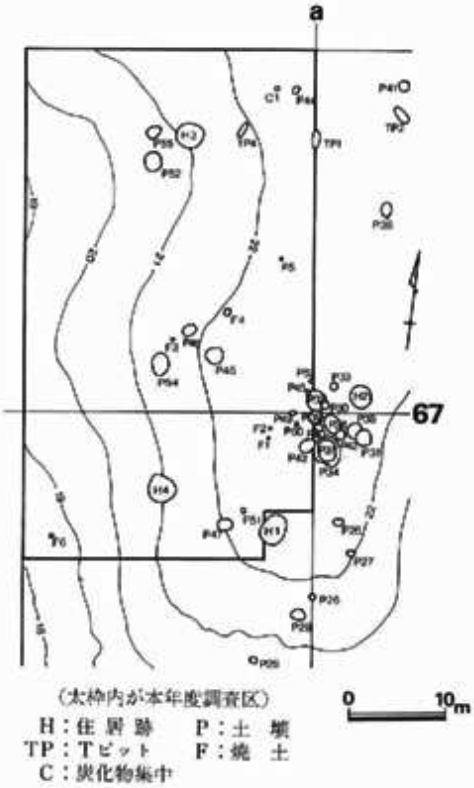
検出された遺構は竪穴住居跡2軒(H－3・4)、土壙13基(P－43～55)、Tピット1基(TP－4)、焼土6ヵ所(F－1～6)炭化物の集中地点1ヵ所(C－1)である。昨年度調査した土壙群に隣接するP－43の壙底からは、副葬品と考えられる足形付土製品の破片2点とつまみ付ナイフ3点が出土した。土製品は東釧路Ⅳ式土器にみられる羽状縄文と幼児の右足の足形が付けられたものである。2つの破片は同一個体の可能性もある。出土遺物は約9,000点。土器の大半は縄文時代早期のもので、コッタロ式と東釧路Ⅳ式土器が多く、東釧路Ⅲ式、中茶路式土器がそれに次ぐ。縄文時代前期の綱文式土器や後期の土器もみられる。石器も縄文時代早期の石鏃や、つまみ付きナイフなどが多い。また、翡翠製の玉が遺物包含層から出土している。



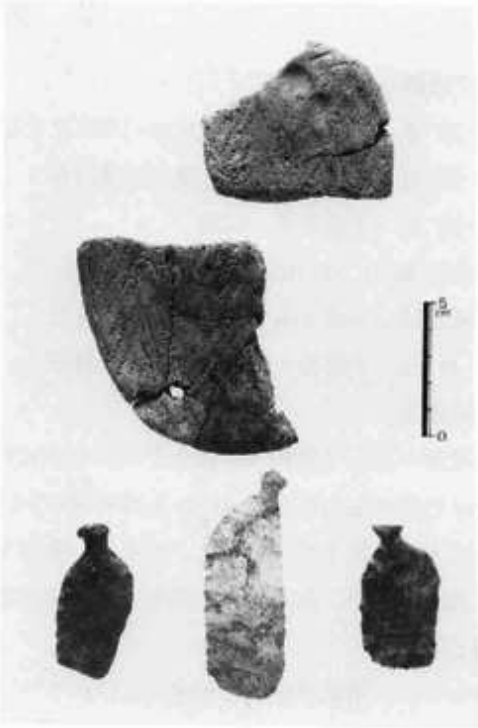
各遺跡の配置

1．美々7遺跡，2．美々8遺跡A地区
3．美々8遺跡B地区，4．美々8遺跡低湿部

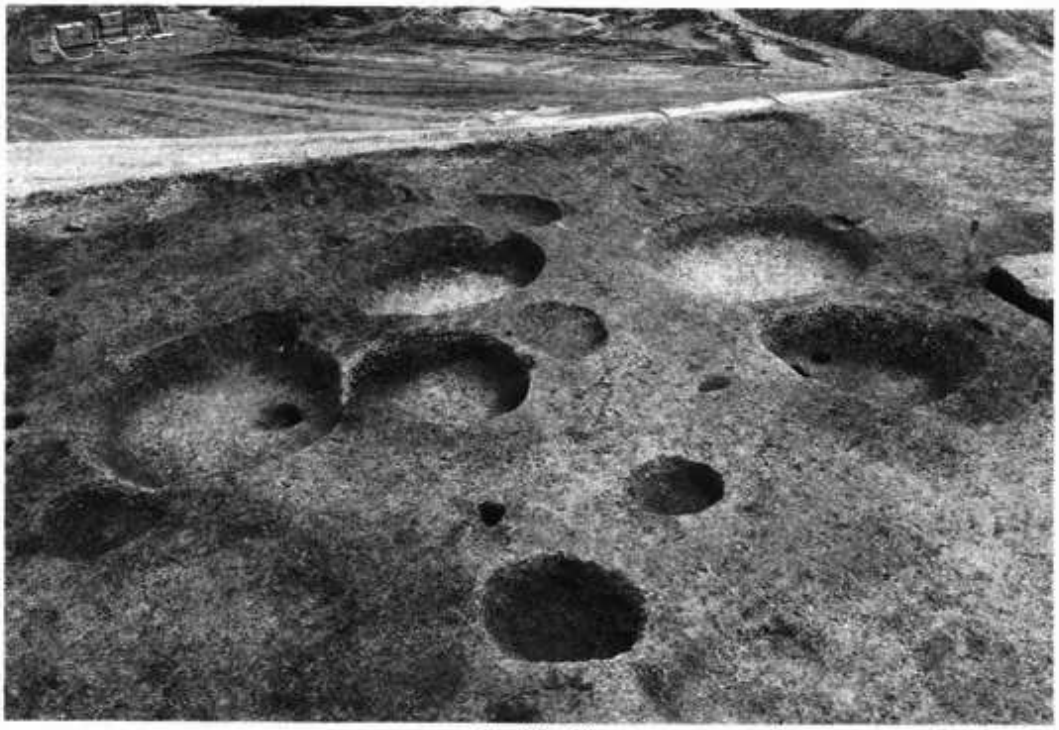
遺跡の位置



遺構位置図



P-43 出土遺物



土　壙　群

美々8遺跡（A－03－94）

事 業 名：新千歳空港建設用地内埋蔵文化財発掘調査

委 託 者：北海道開発局札幌開発建設部

所 在 地：千歳市美々1714

調査面積 ：8,758 m²

発掘期間 ：平成4年5月6日～10月30日

調 査 員：千葉英一、佐藤和雄、三浦正人、田口　尚、皆川洋一、越田雅司、鈴木　信

遺跡の概要

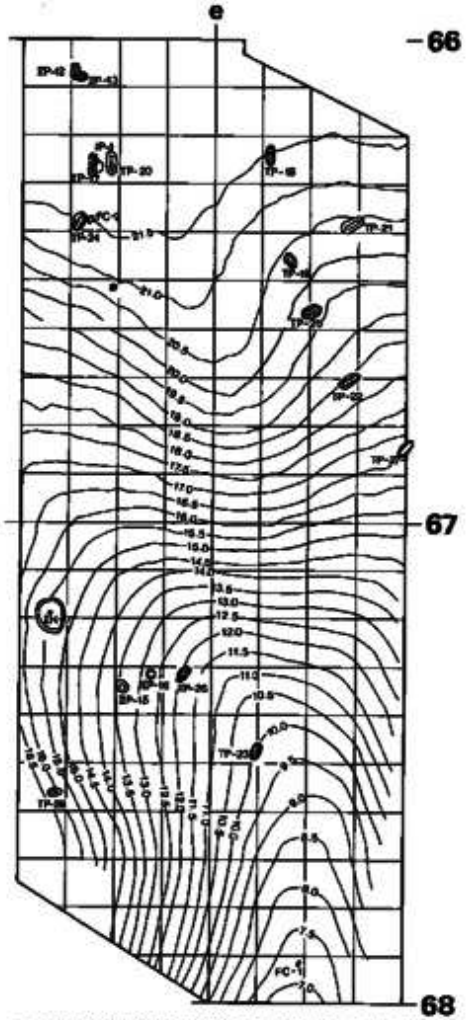
本遺跡は美沢川左岸の標高約20 m の台地とそれに続く斜面に立地している。今年度の調査区は、平成3年度調査区の東側に隣接する部分（A 地区）と東北側の平坦部分（B 地区）の2ヵ所である。A 地区では旧表土とⅠ黒層、Ⅱ黒層の調査を実施した。B 地区については平成3年度の試掘調査の結果をもとに、重機を併用してⅠ・Ⅱ黒層の遺構確認調査を実施した。

遺構と遺物

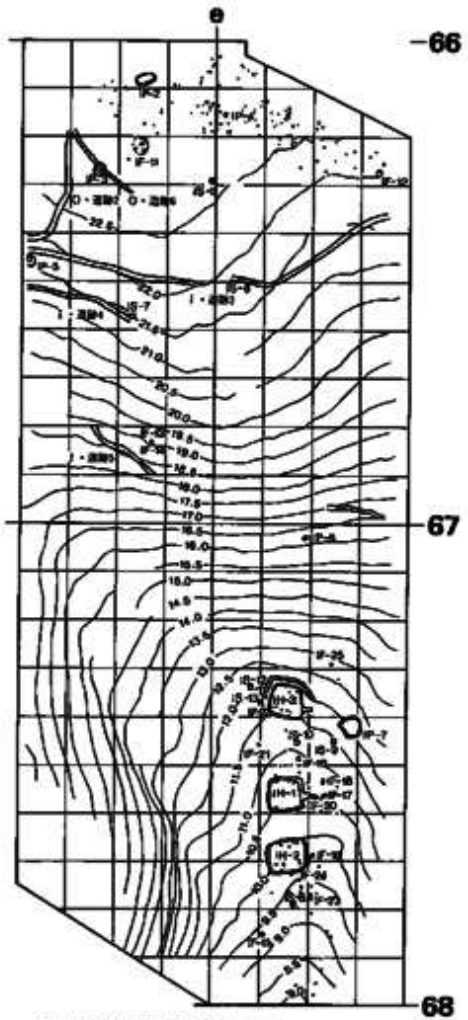
＜A 地区＞　旧表土で検出された遺構は土壙7基、道跡1条、柱穴3個、溝1本である。土壙は1950年代に米軍が演習の際に掘ったものと思われる。道跡と柱穴は土壙の下層から発見された。道跡は昨年度発掘された道跡に続くものである。旧表土から出土した遺物には陶磁器、ガラス玉、釘、薬莢、鉄製品、礫などがある。

Ⅰ黒層で検出された遺構は竪穴住居跡3軒、墓1基、土壙5基、小柱穴158個、道跡5条、焼土14ヵ所および集石8ヵ所である。竪穴住居跡は擦文時代のもので、調査区南部の溜れ沢に位置している。プランは径約4 m の隅丸方形、カマドをもつものが2軒ある。墓は住居跡ⅠH－1の覆土上に腐蝕した遺体とベンガラがみとめられたことにより、確認されたものである。土壙ⅠP－6はⅠ黒層上面で、出土した熊の頭骨を除いたところ掘り込みが検出されたものである。小柱穴は調査区北側の平坦部と南側斜面部の2ヵ所に集中している。道跡は新たに発見したものは1条のみで、そのほかは昨年度調査された道跡に続くことが確認された。遺物の大半は擦文時代の土器で、これに伴い礫、黒曜石の剥片、鉄製品、土玉などが出土している。Ⅱ黒層の遺構は竪穴住居跡1軒、土壙5基、Tピット12基、剥片集中地点2ヵ所が検出された。竪穴住居跡は隅丸方形に近いプランや出土した遺物からみて、縄文時代早期のものとみられる。土壙のうちⅡP－15からは壁ぎわに5本のポイントが置かれた状態で出土している。TピットはTP－28のみが壙底に杭跡をもつ小判形で、そのほかは溝状のものである。Tピット構築時の掘り上げ土が9ヵ所確認されている。遺物のうち土器片は縄文時代早期の東釧路Ⅳ式土器が大半を占め、次いで後期末のものが多い。石器は石鏃が多く、つまみ付きナイフ、ポイント、スクレイパー、ドリルがこれに次ぐ。石斧、たたき石、石錘などの礫石器も出土している。

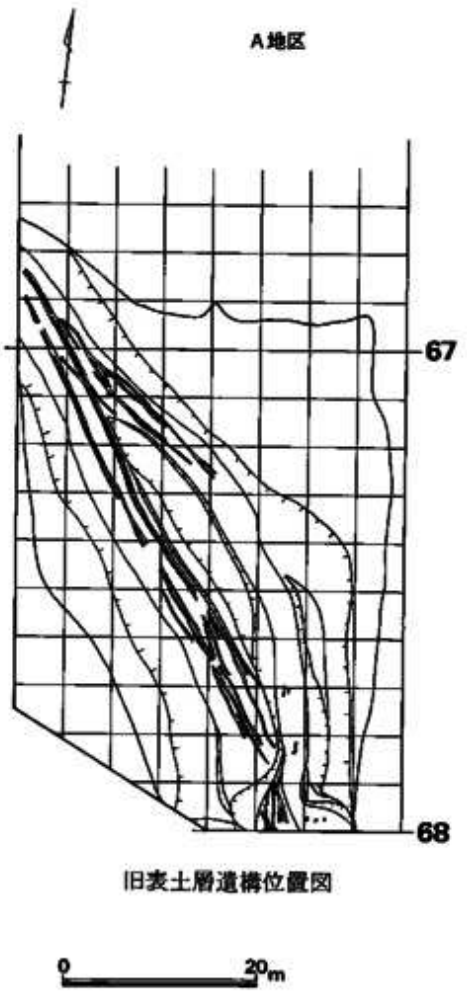
＜B地区＞　Ⅰ層上面で米軍によるものとみられる土壙が17基、Ⅰ黒層では集石3ヵ所、Ⅱ黒層ではTピット22ヵ所が発掘された。



II黒層遺構位置図(等高前は樽前d₂火山灰上面)



I黒層遺構位置図(等高線はI黒層上面)



旧表土層遺構位置図

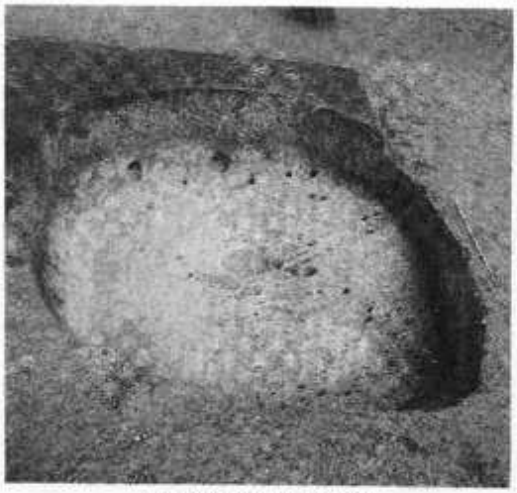
遺構位置図

表土層調査状況

竪穴住居跡（IH-1）

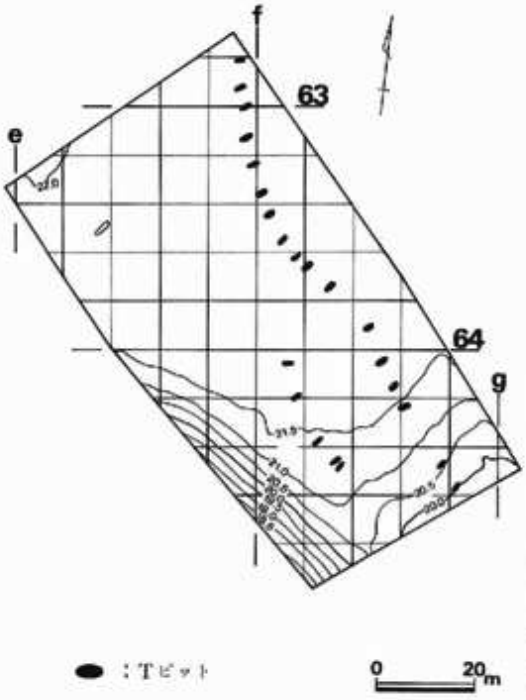
礫出土状況

遺物出土状況



竪穴住居跡（IIH-7）

Tピット（TP-19）右は土壙（IP-3）



B地区遺構位置図

Tピット列

美々8遺跡（低湿部）

調査面積：2,011 m²

発掘期間：平成4年5月6日～10月30日

調 査 員：千葉英一、佐藤和雄、三浦正人、田口　尚、皆川洋一、越田雅司、鈴木　信

遺跡の概要

本遺跡の低湿部は美沢川の流路が屈曲する地点の左岸に広がっている。標高は2.7 m～6 m。基本層序（図1）は標高5 mを境にして、上は台地部から斜面部の標準土層に近似しており、下は植物繊維層（0黒層・I_1黒層・I_3黒層・I_5黒層）とわずかの植物繊維を含む腐植泥（旧表土層・I_2黒層・I_4黒層）が互層になっている。下部には植物繊維を含まない腐植泥（I_6黒層）と脱色したI_6黒層、風化あるいは水磨を受けた樽前c火山灰が混じり合ったI_7黒層がある。旧表土層からI_1黒層にかけてはアイヌ文化期、I_2黒層からI_7黒層では擦文時代の遺構と遺物が検出された。

調査にあたっては、昨年度までのデータをもとに土層が最も安定した台地の付近から開始した。排水効率、安全対策を考慮して作業は3回に分けて実施した。美沢川に近接する部分については多量の湧水があることから、クラムシェルにより土壌を採取して遺物の取上げをおこなった。採取した土壌は微細遺物を検出するため、来年度の調査で水洗選別作業を行う予定である。

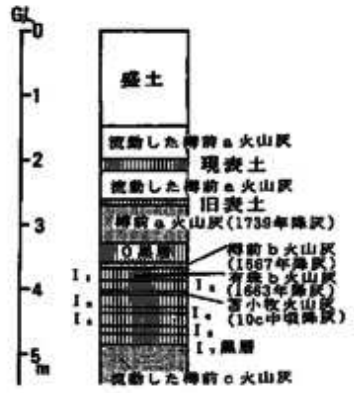
遺構（図2）

道跡：旧表土層において杭跡や礫、木製品などの分布が希薄な帯状の区域があった。斜面北側からおりる道跡の延長線上にあたることから、ここに道が続いていたものと推定される。

物送り場：調査区北端の斜面と低地の地形変換点にあたる位置において、旧表土、0黒、I_1黒の各層から、それぞれ物送り場が発掘された。いずれも炭化物と灰層が堆積しており、出土遺物の多くは、故意に切断あるいは破壊された状況で検出されている。とくに0黒層の物送り場の南半部では木製品が多量に出土している。

建物跡：掘立柱建物跡が旧表土層と0黒層、I_1黒層の各層からみつかっている。旧表土層では腐朽した柱が並んで検出された。主柱の直径は約15 cm、2間×4間の規模をもっている。0黒層とI_1黒層では柱と桁が倒壊した状態で検出された。主柱の太さと建材の分布範囲や量から推定すると、大小それぞれ数軒の建物が立っていたようである。

舟着場：舟着場は0黒層からI_1黒層で発掘された。「コ」の字型の舟溜りは南西側に口を開き、南側にはこれに並行して舟揚げのためのスロープを削りだしている。



標準土層柱状図

立杭：調査区北東部の旧表土層からI_3黒層には、多くの立杭が分布していた。直径8 cm以上の杭については等高線に並行する配列がみてとれるが、これ以下のものには、配列の規則性が見出しにくい。副木や根固め礫があるものもあった。杭の先端に付着した火山灰や土壌から、杭が打たれた時期の細分が可能である。

杭穴：調査区北側斜面の旧表土層からI_3黒層には、多数の杭穴が分布していた。杭穴の覆土に含まれる火山灰や土壌により、杭が打たれた時期の細分が可能である。

擦文土器集中地点：北側斜面から低地にかけてのI_2黒層からI_7黒層では、擦文土器がまとまって分布していた。I_2黒層では擦文時代中期後半から後期の時期のもの、I_3黒層からI_7黒層では中期前半以前のものが出土した。

集石：0黒層からI_7黒層では集石が検出された。本遺跡付近ではあまり礫を産出しないが、これらの岩質、形状をみると、日高地方の河川や海岸で採集され持ち込まれた礫が多くを占めるものと推定される。

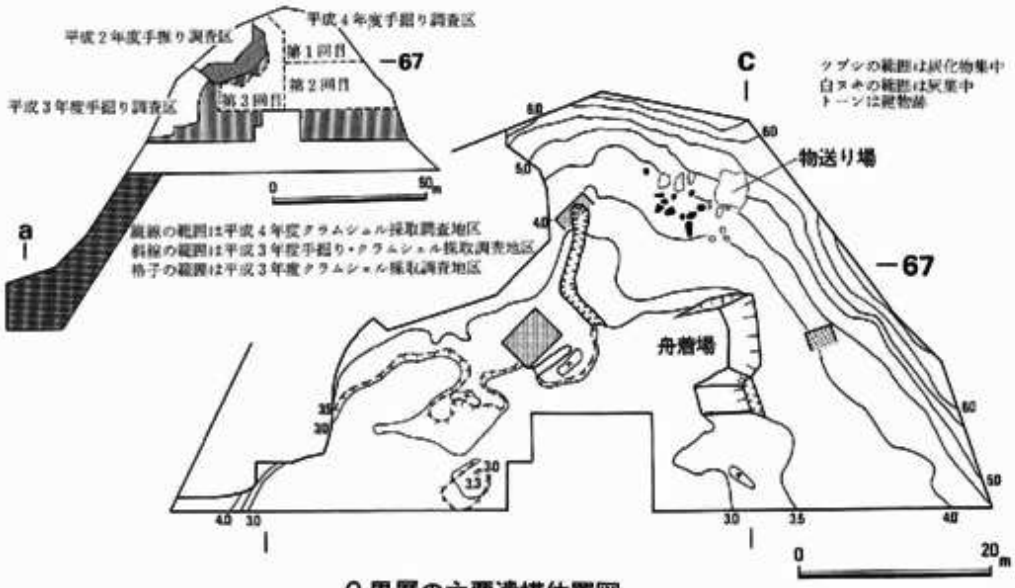
その他の遺構：調査区には多くの焼土が分布している。ほかに、動植物遺存体や炭化物および灰の集中地点がみつかっている。

遺物

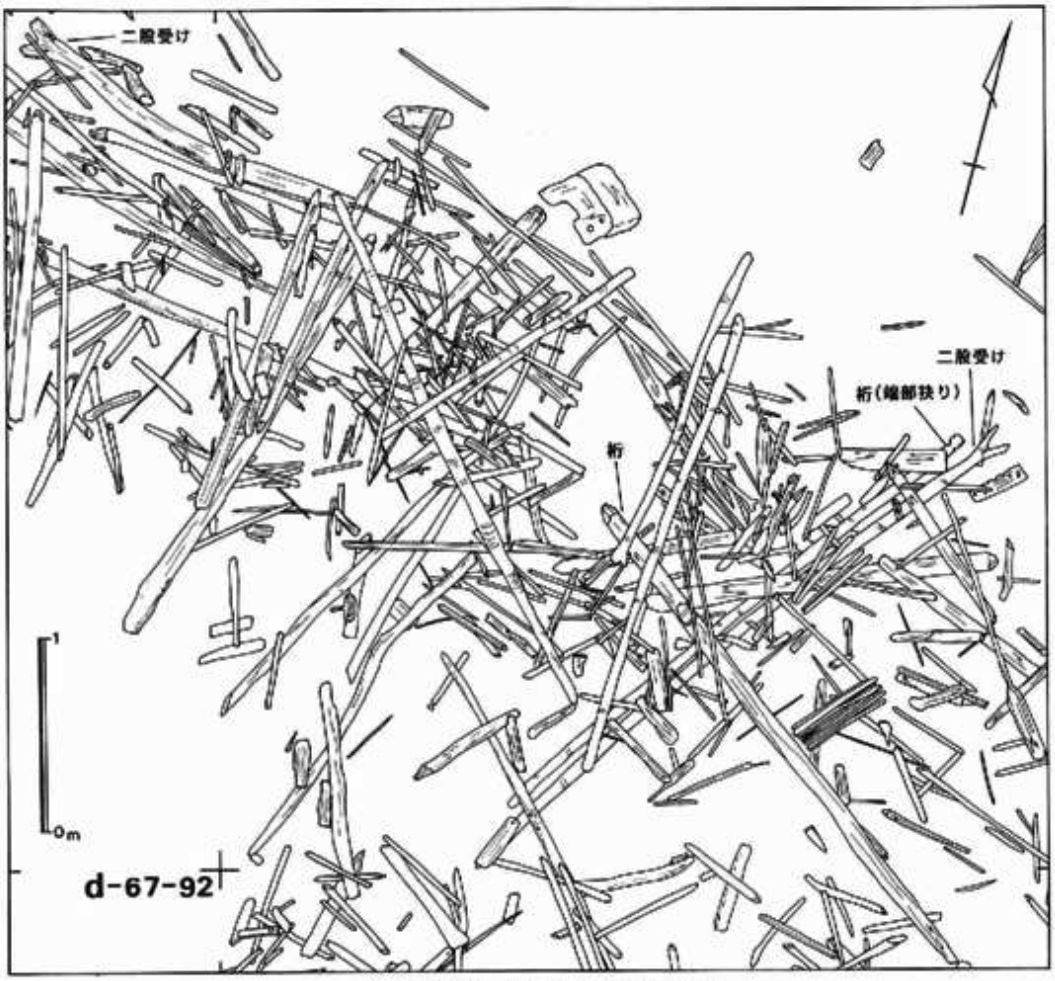
アイヌ文化期の遺物は調査区のほぼ全域に分布しているが、とくに物送り場と建物跡付近に集中する傾向があった。遺物の種類は建材、舟材、狩猟および漁撈具、農耕具、道具類、容器類などの木製品のほかに金属製品、陶磁器、石製品もある。木製品のなかにはアイヌ文様の彫刻や祖印（イトクパ）がはいったものや線刻画が描かれたものもみられる。擦文時代の遺物は調査区の北半部で出土した。擦文土器、土師質土器、須恵質陶器、木製品、金属製品、搬入された礫などがある。下表に主体となるアイヌ文化期の出土遺物について列挙する。

遺物一覧

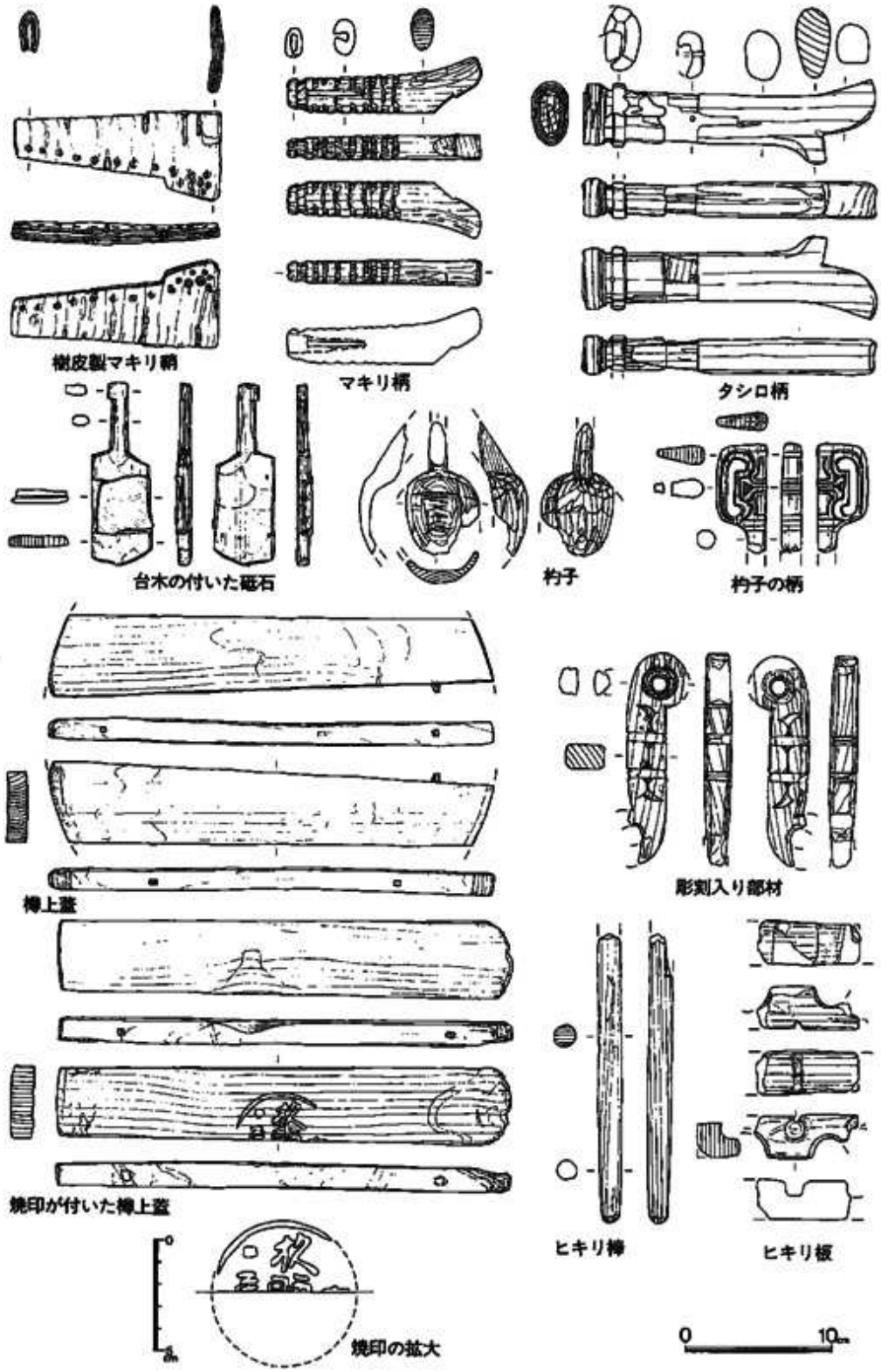
建材・土木材等	二股の受部をもつ柱、桁・杭・板・梯子・土止め材、用途が限定できない板材・角材、丸木材・半割材・偏割材・薄柾目板、木材加工による切片・木端、鎹、釘
交通・運搬具	板綴舟（イタオマチプ）の舷側板・櫂受部、車櫂・櫂・あか汲み
漁撈・狩猟具	鮭突き鈎（マレプ）の台部分、回転式離頭銛（キテ）の中柄・竿・手掛け部、やす、魚叩き棒（イサパキクニ）、矢の中柄、矢柄
加　工　具	縦槌、横槌、楔、止め串類、砥石（ピッ）、台木、小刀（マキリ）の柄・樹皮製の鞘、山刀（タシロ）の柄・鞘、斧、鉈、砥石（ルイ）、台石
食 用 具 類	刺串、挟串、団子篦（シトペラ）、杓子（カスプ）、箸（パスイ）、漆塗り椀・皿、鉢（ニマ）、盆（イタ）、折敷、肥前系陶磁器椀・皿、備前系擂鉢、吊り耳鉄鍋・内耳鉄鍋、曲物、桶、樽
暖房・喫煙具	ヒキリ板、ヒキリ棒、火打石（カラスマ）、炉鈎（スワッ）、先の焼けた燈火用・焚付用のシラカバ樹皮巻、薪の燃え尻、灰取、キセル
装身具・履物	ガラス玉、笄、櫛、かんじき（テシマ）、下駄
祭　祀　具	木幣（イナウ）、捧酒箸（イクパスイ）、花矢（ヘペライ）、制裁棒（シュト）
そ　の　他	宋銭、明銭、寛永通宝、鉄・銅などの金属片



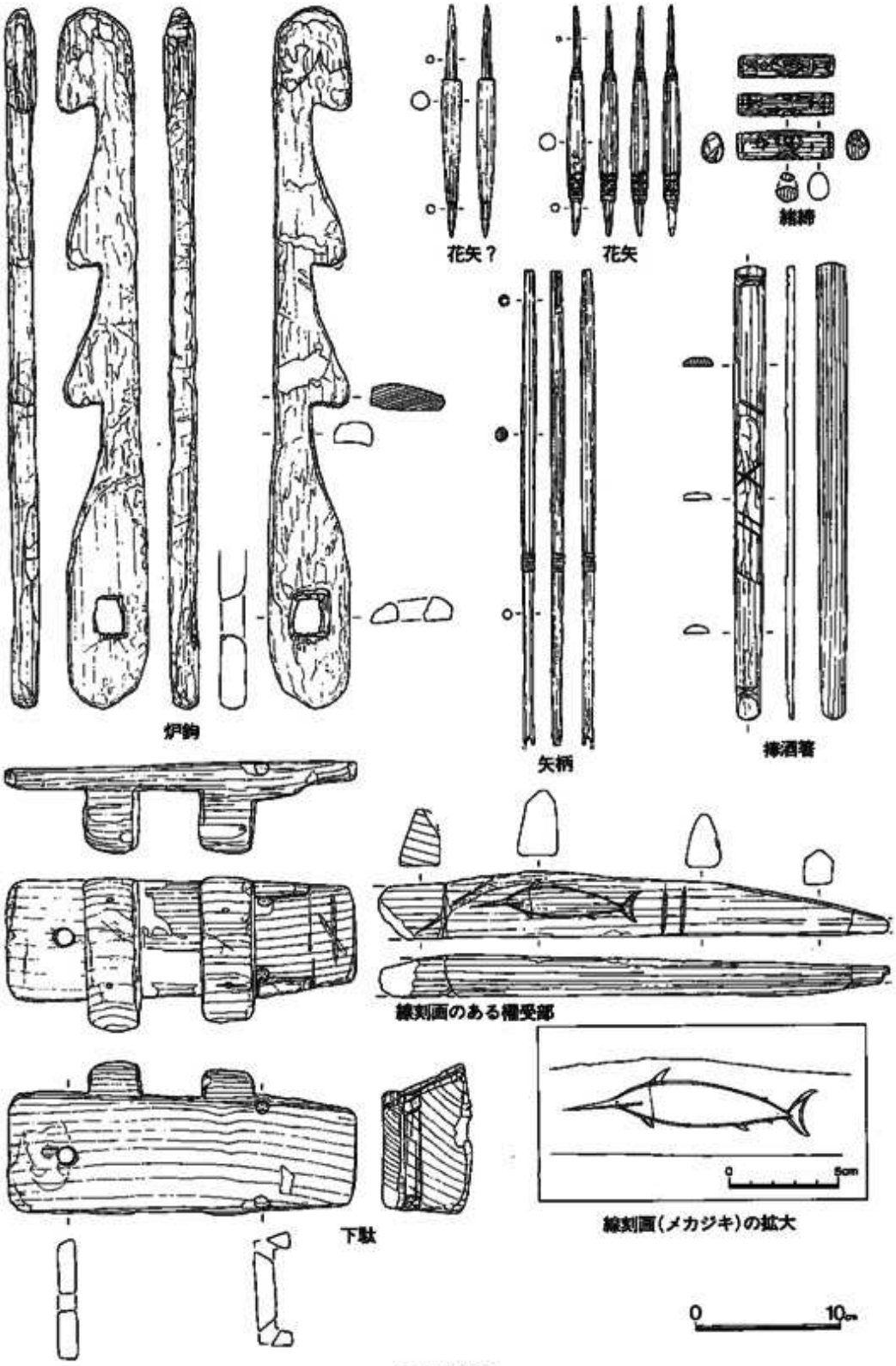
O 黒層の主要遺構位置図



O 黒層遺物（建材）出土状況図


樹皮製マキリ柄
マキリ柄
タシロ柄
台木の付いた砥石
杓子
杓子の柄
彫刻入り部材
樽上蓋
焼印が付いた樽上蓋
ヒキリ棒
ヒキリ板
焼印の拡大
0
10cm

出土木製品



出土木製品

調査状況

建材出土状況

板綴舟の舷側板出土状況

あか汲み

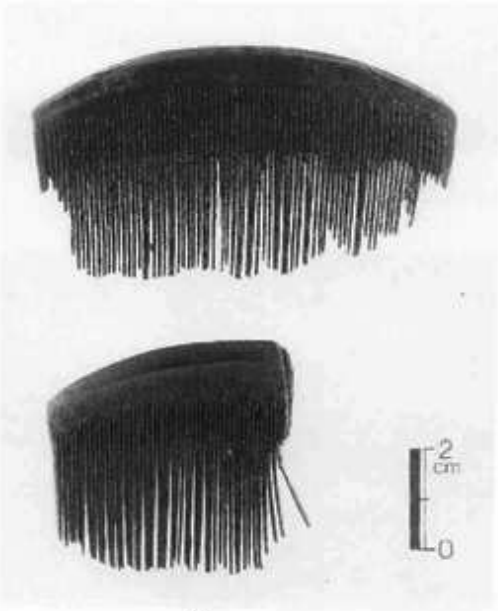
櫂受け部

車　　櫂

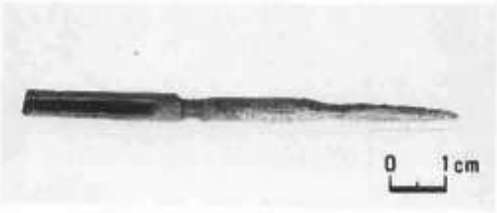
まとまって出土した櫂

鋸歯状文のついた櫂

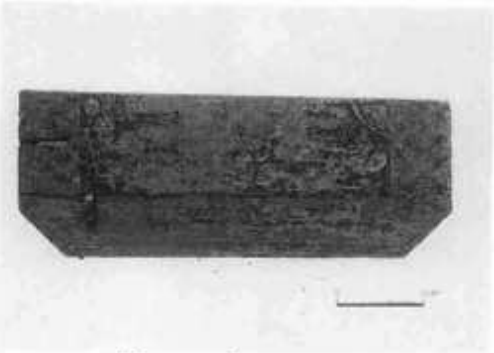
制　裁　棒



櫛



鮭突き鉤台のミニチュア



箱　の　蓋

ユカンボシＥ５遺跡（Ａ－04－６）

事 業 名：一般国道36号恵庭バイパス建設工事用地内埋蔵文化財発掘調査

委 託 者：北海道開発局札幌開発建設部

所 在 地：恵庭市戸磯180-4ほか

調査面積 ：3,482 m²

発掘期間 ：平成4年5月6日～8月8日

調 査 員：鬼柳　彰、田才雅彦、鎌田　望、西脇対名夫

遺跡の概要

本遺跡は恵庭市南部を東流するユカンボシ川の支流、旧トイソ川の右岸に位置している。

調査区はＡ・Ｂ両地区に分かれている。北側のＡ地区は原生林が国有保安林として残されている所で、樹木が生い茂り、地形や土層が自然のまま残っている。南端部には旧トイソ川の汀線が入り込み地表下には今も水が流れている。Ｂ地区はこれより約200ｍ南方に位置している。従来、畑や住宅地として利用されてきた所で、樽前Ａ火山灰から遺物包含層の上部まで耕作されている。Ｂ地区は昨年度、3,285 m²を調査して縄文時代の竪穴住居跡１軒(早期)、土壙６基（早期)、Ｔピット14基（後期)、焼土41ヵ所（早期～後期）のほか２個体の土器を副葬した擦文時代の墓を１基を検出した。今年度の発掘範囲は昨年度調査区に続くＢ地区南部で、調査面積は昨年度の40%に過ぎないが、遺構、遺物の量は昨年度調査区よりかなり多い。

Ａ地区の遺構と遺物

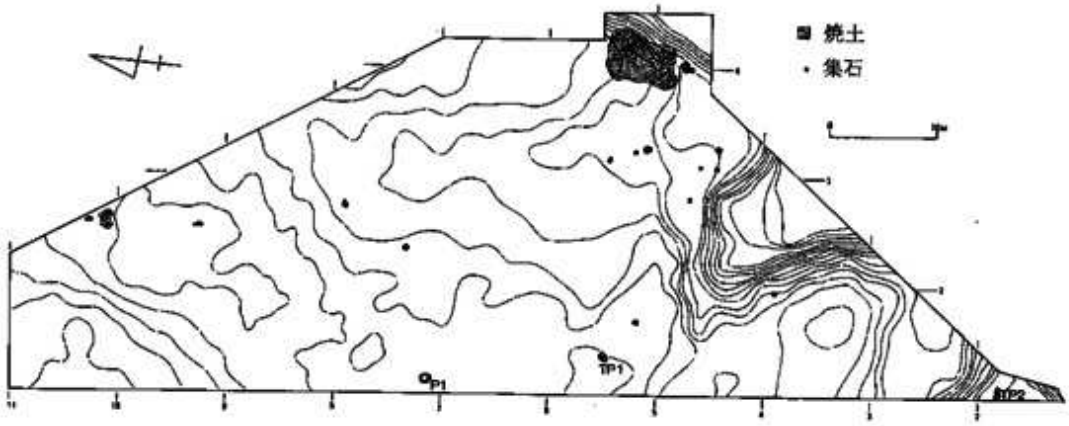
遺物包含層は第Ⅱ層の黒色腐植土、上部には縄文時代中期以降、下部には早期および前期の遺物が入っている。南端の低湿地からも縄文時代前期や後期の遺物が出土している。

検出された遺構は土壙１基、Ｔピット２基、集石４ヵ所である。ほかに焼土が12ヵ所みつかっている。焼土には自然現象によるものと考えられるものも含まれている。

出土遺物のうち土器は縄文時代早期の東釧路Ⅲ式、コッタロ式、中茶路式、前期の綱文式、中野式、中期の円筒上層式、後期の手稲式など各時期におよんでいるが、主体となるのは早期のものである。石器には石鏃、つまみ付きナイフ、石斧、すり石などがある。遺構と遺物の分布をみると、南西部に多く、調査区西側の保安林中に集落跡が残されている可能性が強い。調査区南東部の樽前ａ火山灰

遺跡の位置（1:50,000）

直下より鉄鍋が1個体出土した。径約26 cm、深さは12 cmほどで吊り耳があり鉉も残っている。底部には3つの脚がある。製作時期については、今のところ不明である。



A地区遺構位置図

B地区の遺構と遺物

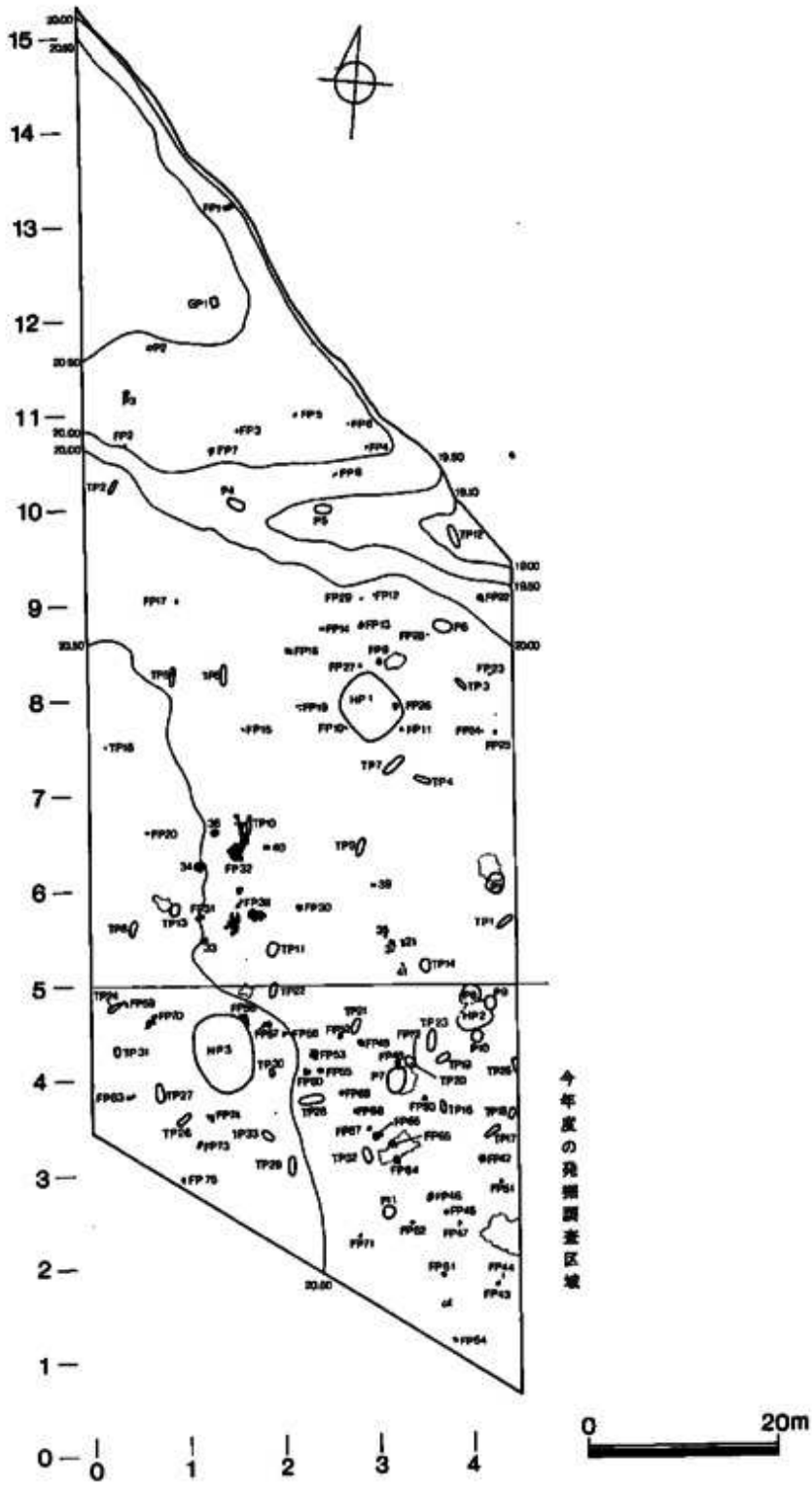
検出された遺構は竪穴住居跡2軒、土壙5基、Tピット19基、集石1ヵ所、焼土34ヵ所である。ほかに、Tピット構築時の排土も確認されている。

竪穴住居跡HP−2の床面からは石皿が1点出土した。HP−3は構築後に拡張されたとみられる住居跡である。地床炉が2ヵ所ある。床面から3個体の萩ヶ岡2式相当の土器が出土した。P−7は壙底に二つ小ピットをもつ土壙である。

Tピットには楕円形で壙底に杭穴が1個ないし2個あるものと、細長く杭穴のないものの2つのタイプがある。それぞれ東西方向に並ぶものや、等高線に沿って並ぶものがあるが、配列の判然としないものもみられる。また、TP−16、19、22では周辺に構築時の排土が確認されている。なお、TP−15は調査区東端に排土が堆積していたもので、本体は発掘区域の外にあるものと推定される。34ヵ所の焼土のうち、9ヵ所の焼土から縄文時代中期の土器片が出土した。また、14ヵ所の焼土からは焼け弾けた礫や焼けた石器類が検出された。焼土は大部分が等高線に沿って帯状に並んでいる。

遺物包含層からは縄文時代早期から後期の土器が出土している。早期では東釧路Ⅲ式、コッタロ式、中茶路式土器など、前期では綱文式と大麻Ⅴ式に相当する土器がある。中期の土器は円筒土器上層式、萩ヶ岡1・2式、天神山式、柏木川式など各形式におよぶ。後期の土器は余市式に相当するものである。2ヵ年にわたる本遺跡B地区の調査で出土した22,000点あまりの土器片のうち大半は縄文時代中期のもので、萩ヶ岡2式相当および天神山式相当のものが大部分を占めている。

石器は焼土の近くから検出されたものが多い。石鏃、石槍、つまみ付きナイフなどの剥片石器のほか、石斧、すり石、北海道式石冠など礫石器も多い。

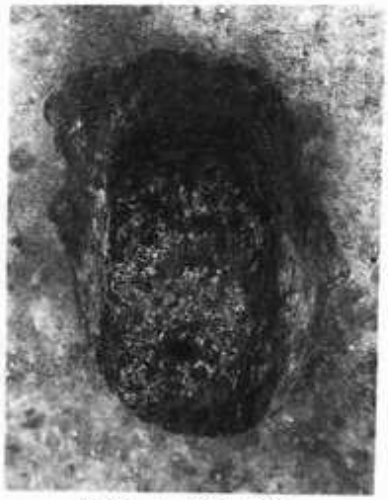


B地区遺構位置図

A 地区調査状況

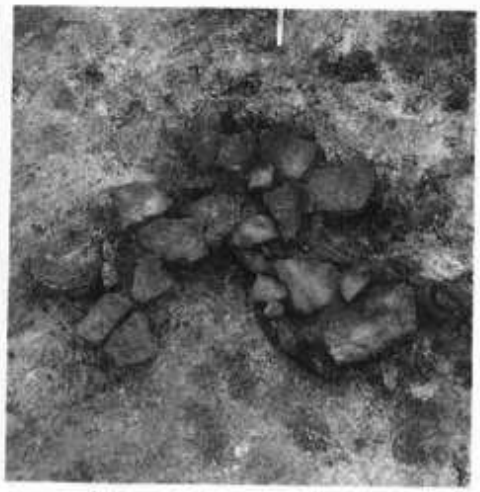
鉄　　鍋

B 地区調査状況



T ピット（TP-30）

竪穴住居跡（HP-3）



HP-3 土器出土状況

中野A遺跡（B－01－40）

事 業 名：函館空港拡張整備工事用地内埋蔵文化財発掘調査

委 託 者：北海道開発局函館開発建設部

所 在 地：函館市中野町100-1ほか

調査面積：8,500 m²

発掘期間：平成4年5月6日～10月27日

調 査 員：高橋和樹、和泉田毅、遠藤香澄、花岡正光、谷島由貴、山原敏朗、村田　大
倉橋直孝

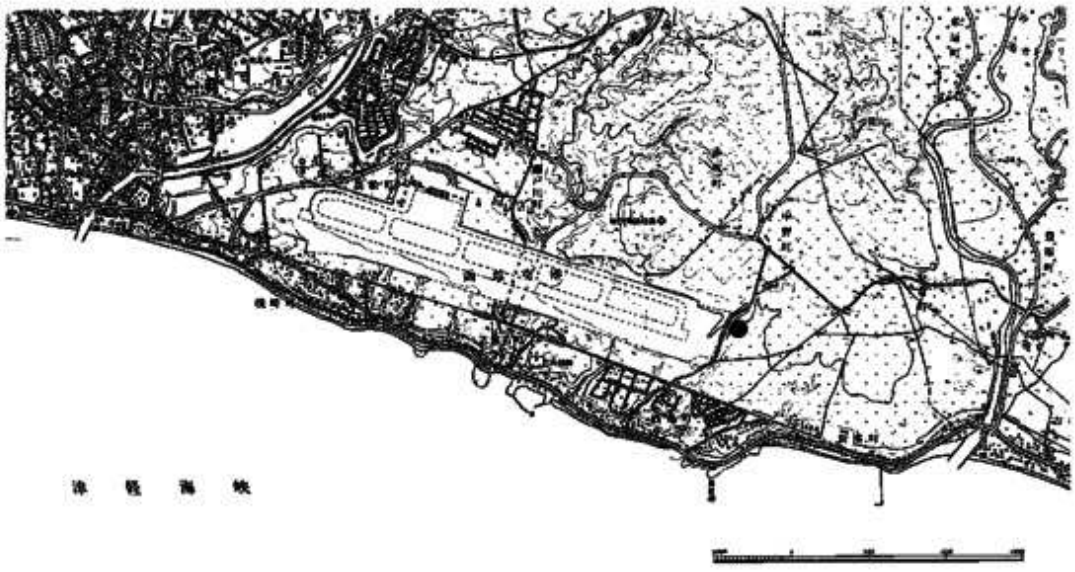
遺跡の概要

中野A遺跡は函館市街地の東方約8 km、津軽海峡に注ぐ銭亀宮の川の右岸に位置している。河口から約1 km遡った標高40～50 mほどの段丘上にあたり、約20 km隔てた海峡対岸の下北半島が間近かに眺望できる。

本遺跡では、昭和50・51年度および53年度に函館市教育委員会によって調査が行われ、縄文時代早期中葉の物見台式土器を伴う竪穴住居跡6軒と土壙12基、早期末葉の梁川町式器を伴う竪穴住居跡8軒、屋外の石組炉のほか合計29基のTピットが検出されている。

当センターが実施した平成3年度の調査では、縄文時代早期前葉の日計式土器に併行する縄文施文土器を伴った竪穴住居跡が1軒、物見台式土器を伴出した竪穴住居跡13軒、土壙10基、焼土2ヵ所のほか、Tピット11基が検出された。遺物も豊富で、物見台式土器に代表される貝殻文尖底土器のほか石鏃、石槍、石錐、箆状石器、掻器、削器、石匙などの剥片石器、さらに擦石、たたき石、砥石、石鋸、石錘、磨製石斧、擦切残片などの礫石器が多数出土している。

平成4年度は、昨年度調査区の南方一帯を対象に調査を継続した。試掘調査によって竪穴住

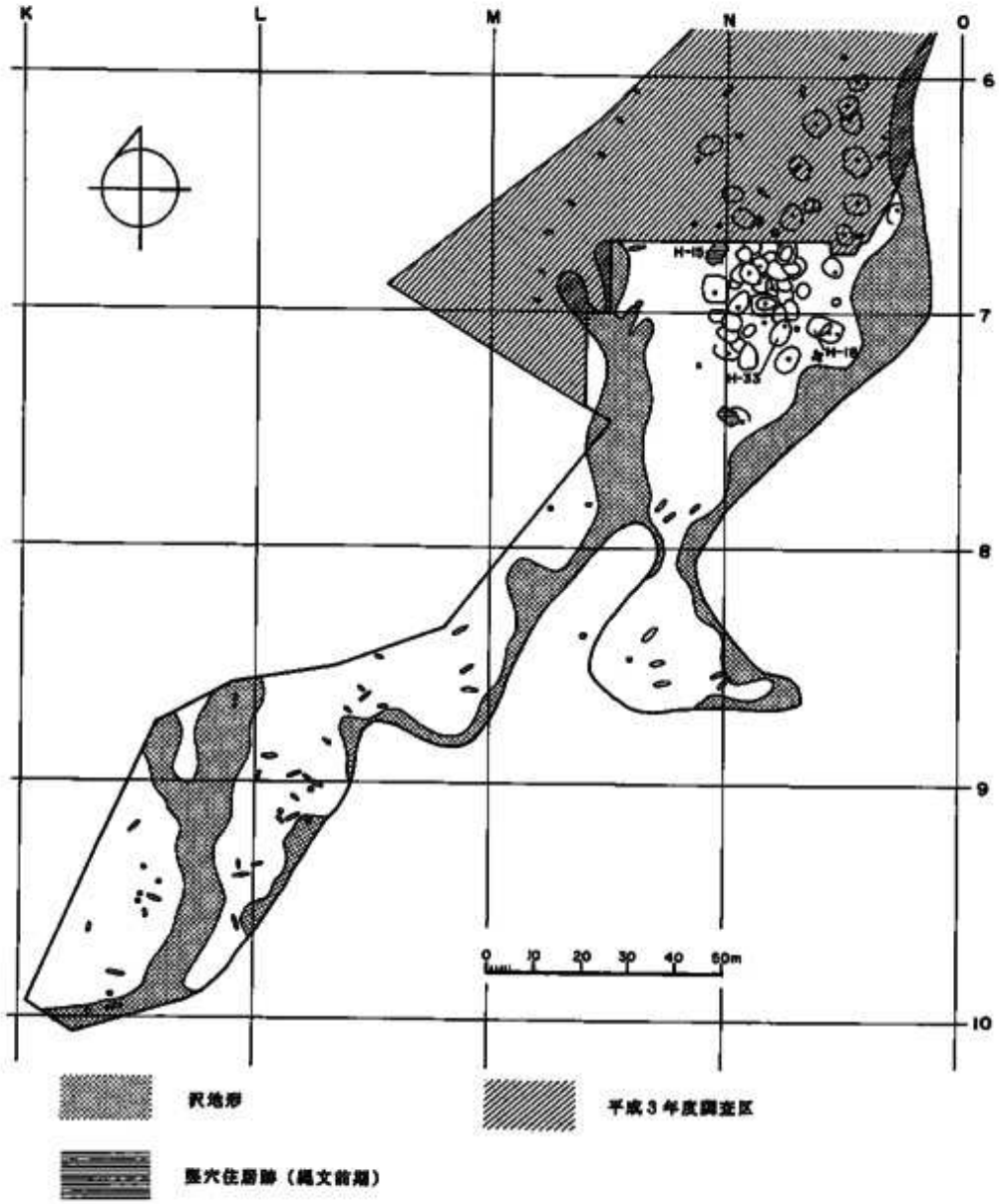


遺構の位置

居跡などの遺構や遺物包含層の存在が知られていた地区3,200 m²を主体に発掘を行い、包含層がほとんど残っていないと判断された5,300 m²については、Tピットの発見、精査を主眼とする遺構確認調査を実施した。

遺構と遺物

今年度の調査では、平成3年度調査区に見出された竪穴住居跡群の南に隣接して、新たに竪穴住居跡42軒が検出された。そのうち2軒（H－15・43）は、縄文時代前期前葉の春日町式



遺構位置図

土器を伴う竪穴住居跡である。長軸方向は異なるが、形状や構造もほぼ同一で、プランは長方形、側壁の一部に張り出しをもち、明確な炉址はない。柱穴は中央に3本、長軸側の一端に3本、他端に4本と、整然とした配列がみられた。

このほかの竪穴住居跡は昨年度と同様、物見台式期に属するものと考えられ、径30mほどの範囲内に群在している。とくに集落の中央部には規模がやや小さく、掘り込みの浅い竪穴住居跡が密集し、重複する傾向が認められた。竪穴住居跡の形状や構造にはいくつかのタイプが認められ、数軒単位での集落の変遷があったものと推定される。

平面形については四角のものは少なく、卵形や不整五角形あるいは不整楕円形のものが多かった。前者には隅丸方形状のプランをもち、床面の中央南寄りに地床炉がありH－16、隅丸長方形状で中央に地床炉をもつH－18、やや規模が小さく炉もないH－45、不整な台形状プランのH－26などがある。後者には、尖端部あるいは長軸の一端が北を向くH－20・32・37などや、H－19・23・29・33・39・55・56など北東を向くもの、H－25・36など東を向くもの、H－30・31・34・40など南東を向くもの、H－21・46など西を向くもの、H－22・35・48など北西を向くものなどがある。地床炉をもつ例は30%を割り、炉の位置も床面のほぼ中央にあるもの、尖端近くにあるもの、その反対側にあるものなど、様々であった。主柱穴は1～6本で、規則的な配列がみられる例は少ないが、壁沿いに多数の支柱穴がめぐるものが多い。遺物の伴出は数多く、H－25では床面に礫が集中して出土した。

竪穴住居跡以外の遺構としては遺構確認調査区も含めた全域から、土壙12基、焼土2ヵ所、Tピット40基などが検出された。集落跡付近に検出された土壙には墓の可能性があるものもあり、焼土は屋外炉の可能性が高い。

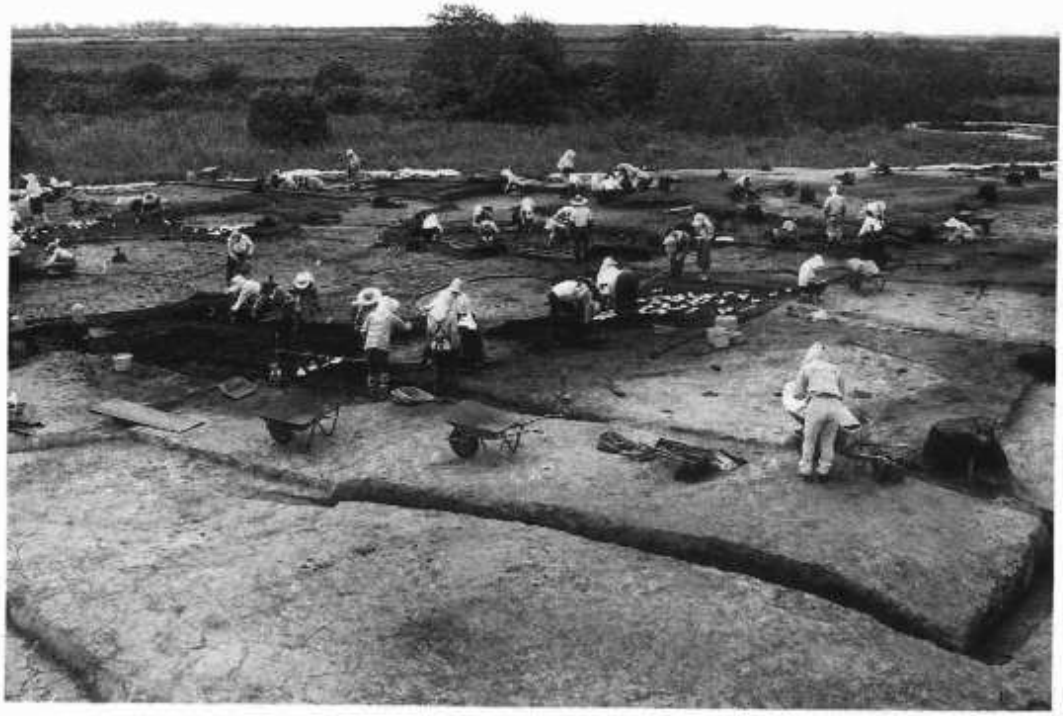
土壙のうち遺構確認調査区で検出されたものは、何らかの作業の結果残された穴が放置された後、自然に土砂が埋まったものと思われる。

Tピットには、長径が①1.5m以下のごく短いタイプ、②1.8m～2.6mほどのもの、③3～4mと狭長なもの、④底が4mを超えるさらに長いものなどがみられた。①や④は数が少なく、ほぼ②と③のタイプが半々を占める。この②と③のタイプには、それぞれわずかながら壙底中央付近に1・2個の小ピットをもつ例がみられた。

Tピットの長軸はほぼ東－西の方向をとるものが多く、北－南方向のものは少ない。配列は銭亀宮の川の河道にほぼ沿って並ぶもの、等高線に直交するように、昭和50・51年度調査区から本年度調査区へと続くものなどがみられた。

出土土器は物見台式の範疇に含まれる貝殻文尖底土器が主体を占め、なかには小型の手捏ね品もみられる。そのほか平底のムシリⅠ式土器や前期の春日町式、トドホッケ式土器もあり、早期前葉の日計式土器併行の縄文施文土器などもわずかに出土している。

石器も数多く出土しており、剥片石器や磨製石斧、礫石器などのそれぞれに豊富な器種がある。石製品にはわずかながら環状石斧や玦状耳飾などがあり、土製品には春日町式土器を利用した土器片錘などがみられた。



調査状況

礫の出土状況

竪穴住居跡（H-18）

縄文時代早期の土器

中野（なかの）B遺跡（B－01－39）

事 業 名：函館空港拡張整備工事用地内埋蔵文化財発掘調査

委 託 者：北海道開発局函館開発建設部

所 在 地：函館市中野町98－1ほか

調査面積：3,700 m²

発掘期間：平成4年5月6日～10月27日

調 査 員：高橋和樹、和泉田毅、遠藤香澄、花岡正光、谷島由貴、山原敏朗、村田　大
倉橋直孝

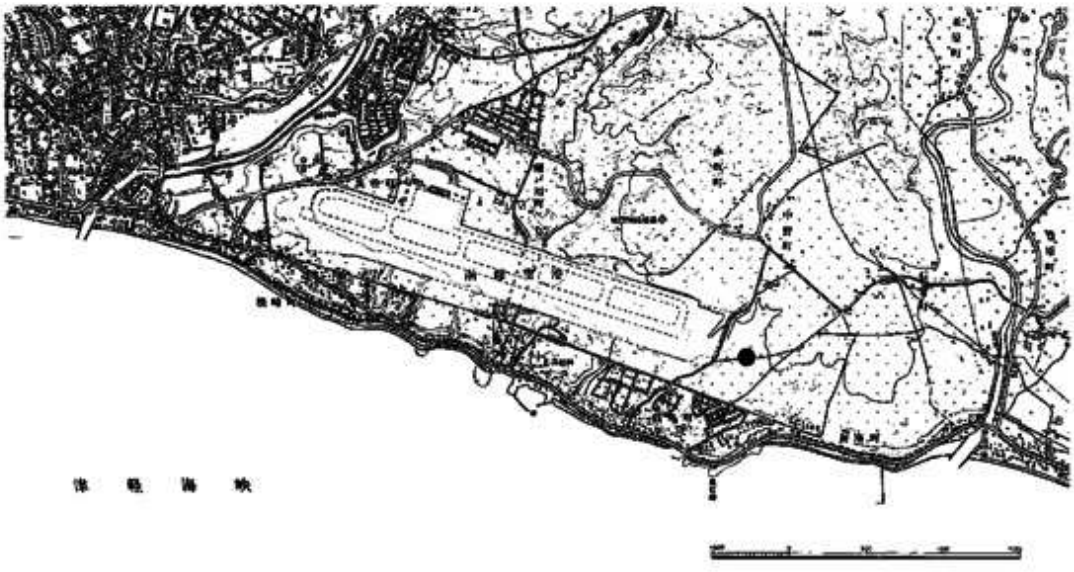
遺跡の概要

中野B遺跡は銭亀宮の川の左岸、標高40～50 mほどの段丘上に位置し、川を挟んで対岸の中野A遺跡と相対している。本遺跡は昭和50・51年度に函館市教育委員会により、進入灯工事区域1,920 m²の発掘調査が行われた。縄文時代早期中葉の住吉町式土器を伴う竪穴住居跡21軒、土壙15基のほかTピット22基など、豊富な遺構、遺物が発掘されている。

本年度の発掘調査区は昭和50・51年度調査区の南西に隣接する地区であることから、大規模な集落の存在が予想されていた。最終的には竪穴住居跡が148軒、土壙および墓壙が計64基、焼土4ヵ所、Tピット12基など多くの遺構が検出された。なお、調査面積3,700 m²のうち調査未了の範囲が150 m²あり、さらにいくつかの遺構が残されている。

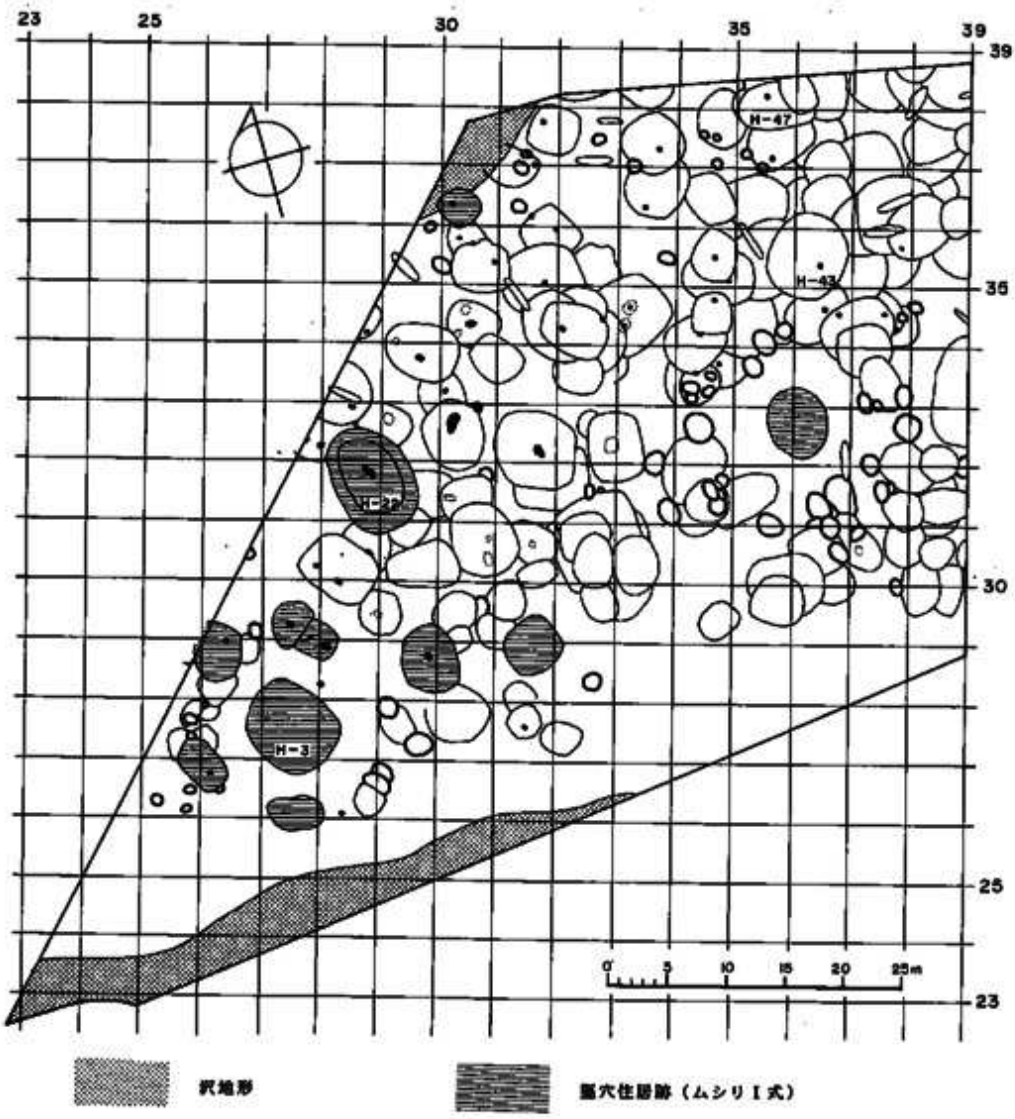
遺構と遺物

竪穴住居跡は住吉町式土器の段階のものが多い。住吉町式からムシリⅠ式にいたる過渡期的な様相を示すものや、確実にムシリⅠ式土器を伴う例も少なくない。住吉町式からムシリⅠ式へと移行する、連綿たる集落の変遷があとづけられるものと思われる。充分な解析はできてい

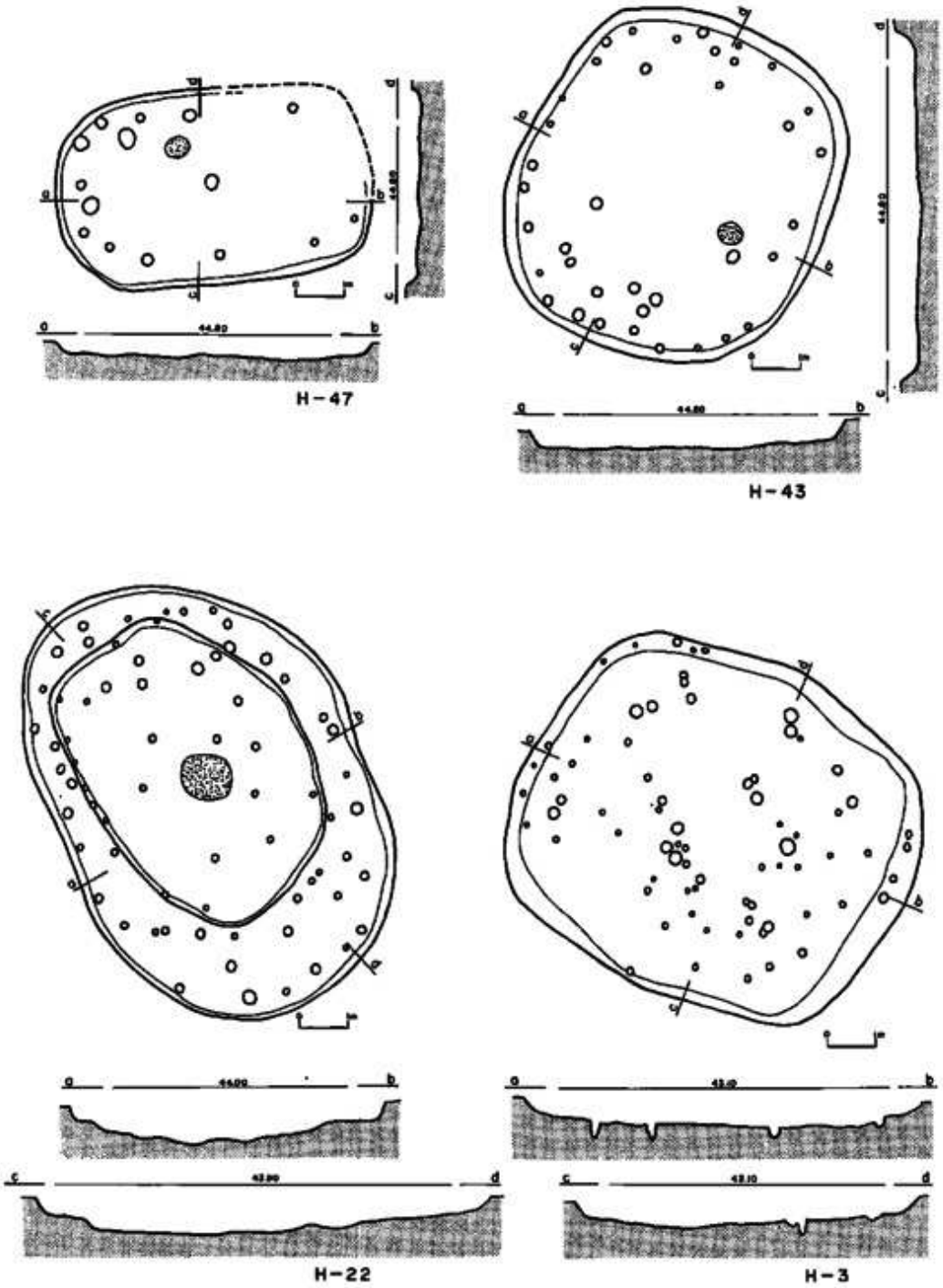


遺跡の位置

ないが、竪穴住居跡は径20mほどの環状にまとまっており、墓壙も廃棄された住居跡にそって、環状に配される傾向があった。このような環状の集落構成は、調査区西南部にみられるように独立して認められる例もあるが、多くはいくつか連結、重複し、きわめて錯綜した状態を示している。住吉町式土器を伴出する竪穴住居跡はH－83のように隅丸方形プランで、中央に隅丸方形の浅い掘り込み炉をもつといった、昭和50•51年度調査区にみられたような典型的なタイプのものもあるが、どちらかといえば不整な楕円形、円形、卵形といった形状のものが多い。明確に炉跡が認められた例は3割程度と少なく、炉をもたないものが過半数を占める。炉跡にはH－94など簡単な石組をもつ例があり、ほかにもいくつか石組炉の萌芽を思わせるよう



遺構位置図



竪穴住居跡

なものがみられた。柱穴については、主柱穴が中央の1本だけと思われる例が少なくない。主柱穴が複数の場合では、4本の柱穴が方形に並ぶ例もわずかにみられたが、大部分の竪穴では柱穴に規則的な配列は認められない。支柱穴は周壁にそって多数めぐるものが多い。根固めのためであろうか、H－96の2本の柱穴には住吉町式土器の破片が、柱穴の壁に貼り付いた状態で残されていた。

ムシリⅠ式土器を伴う竪穴住居跡は、調査区の南西側に多く分布する傾向があり、覆土中に黄灰色のP.D.4火山灰の堆積がみられるものが少なくなかった。形態は不整な隅丸方形や楕円形プランのものが多く、円形や卵形、台形状のものもみられた。長径が8mを超える、大型で深い竪穴住居跡も数軒ある。複数の家族が利用したことも考えられよう。ほぼ半数の竪穴では中央部に地床炉がみられた。主柱穴に規則的な配列が認められる例は少なく、壁沿いに多数の支柱穴がめぐるものが多い。H－22のように大規模な竪穴住居跡、あるいはH－42やH－55などのようにやや小さめの住居跡にもベンチ構造をもつ竪穴があった。

H－74は径5mほどの不整円形の浅い竪穴状遺構で、北半部を主に多量の焼けた礫が集積（写真参照）しており、礫の少ない南縁部には炭化物を多く含む黒色土が弧状に分布していた。おそらく蒸し焼き料理に関連した施設と推定されるが、H－138でも焼けた小礫の集積がみられた。また、P－8は径約1.5mの円形の土壙で、その内外に比較的厚く焼土がのこっており、調理に関連して屋外に設営された炉と思われる。

墓と考えられる土壙は、竪穴住居跡の床や壁を切って深く掘りこまれた例が多い。長径が1.5～2m程度の楕円形のものが多く、土器片や石錘などの遺物を伴出する例が少なくない。埋土上部に数個体分のムシリⅠ式土器片が並べられたP－31や、線刻の施された環状石斧を伴ったP－40などが、その代表例としてあげられよう。また土壙には、住吉町式土器を伴出したP－49やP－59などのフラスコ状ピット（写真参照）、石皿状の礫や擦石、石斧などが詰まったP－50などもあり、機能上いくつかに分類が可能と思われる。

Tピットは、いずれも溝状の狭長なタイプのもので、長軸方向は必ずしも一様ではない。12基のうち7基が竪穴住居跡を切っており、構築年代の新しいことが分かる。

出土遺物はきわめて多い。土器の大半は乳房状尖底が特徴的な住吉町式土器と、平底のムシリⅠ式土器とが占めるが、表館Ⅵ群に類似する縄文土器や、東釧路系の土器などもわずかにみられた。石器は剥片石器、石斧類、礫石器いずれも豊富で、とくに竪穴住居跡内に石皿や擦石、叩石、石錘など礫石器が多い事実からは、居住の安定性がうかがうことができる。このほか土製あるいは石製の有孔円盤や環状石斧など土製品、石製品も出土している。

調査状況

遺物出土状況（H-132）

礫の出土状況（H-74）

竪穴住居跡群

土　　壙（P-31）

土　　壙（P-50）

フラスコ状ピット（P-59）

住居跡（HP-96）柱穴内土器片

茂別遺跡（B－06－17）

事 業 名：一般国道228号上磯町茂辺地防災工事用地内埋蔵文化財発掘調査

委 託 者：北海道開発局函館開発建設部

所 在 地：上磯郡上磯町字矢不来103-1

調査面積：1,660 m²

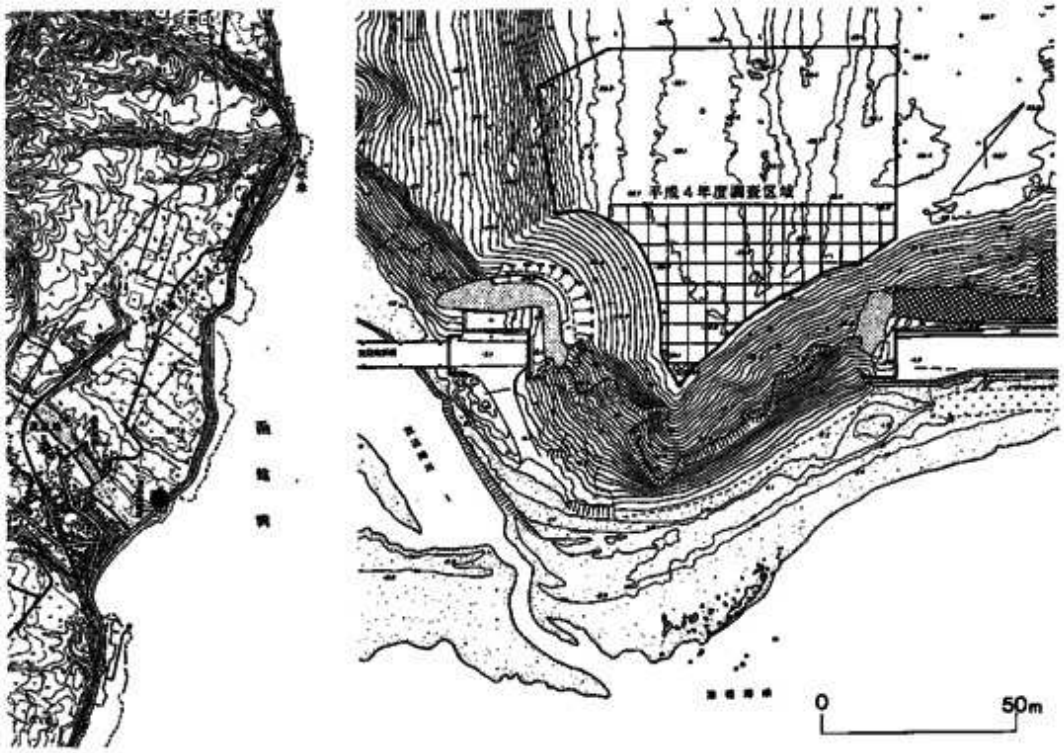
発掘期間：平成4年5月6日～8月8日

調 査 員：越田賢一郎、工藤研治、中田裕香、西脇対名夫

遺跡の概要

本遺跡は茂辺地川河口左岸の段丘上（標高39～40 m）にある。平成3年度から調査が行われ縄文時代、続縄文時代および近世以降の遺構と遺物が検出されている。

土層は上位からⅠ層（表土）、Ⅱ層（火山灰）、Ⅲ層（腐植土）、Ⅳ層（漸移層）、Ⅴ層（黄褐色ローム）の順に堆積している。Ⅱ層の火山灰は白頭山―苫小牧火山灰とみられ、この上位には駒ヶ岳起源とみなされる白色火山灰（Ko-d ?）が部分的に認められる。昨年度はⅢ層上面において、続縄文時代の遺構と遺物が予想を上回る密度で検出されたため、Ⅰ・Ⅱ層の調査とⅢ層上面における遺構の確認までを行った。今年度は昨年度の調査未了区域1,300 m²について、Ⅲ層以下の調査を行うとともに新たに360 m²を加え計1,660 m²を調査した。また、平成3年度出土遺物の整理作業を札幌で行った。本遺跡の調査は来年度も継続される予定である。



遺跡の位置と周辺の地形

遺構と遺物

2ヵ年度の調査により竪穴住居跡8軒、墓17基、土壙14基、石組炉1基、建物跡2軒、溝1本、焼土40ヵ所のほか大規模な壕が検出された（下表）。出土遺物は約46万点、ほぼ半数が土器片である。このほかに搬入されたものと考えられる礫が20万点以上出土している。

〈I層〉　昨年度は近世以降の遺構（P−2・3、溝−1）を調査した。本年度も近世以降の建物跡とみなされる柱穴列が2ヵ所検出されている（建物跡1・2）。

〈III層上部〉　III層上部の遺構は、焼土の一部に時期不詳のものがあるほかは、すべて恵山式土器の時期のものである。住居跡や墓の大部分はII層の火山灰を除去した時点で、浅い窪みや火山灰の落ち込みとして認められた。住居跡は海寄りにまとまっており、ほかの遺構はこれより奥に多く分布している。住居跡の平面形はほぼ円形で、掘り込みは浅い。H−2・4には中央部に石組炉がある。舌状の張り出し部を確認できたものはない。墓は径1m前後のものから径2mを越えるものがあり、これらの多くは壙口とその周囲に礫を配した配石墓である。副葬品には小形の土器や石鏃があるが、この時期の墓としては数が少ない。

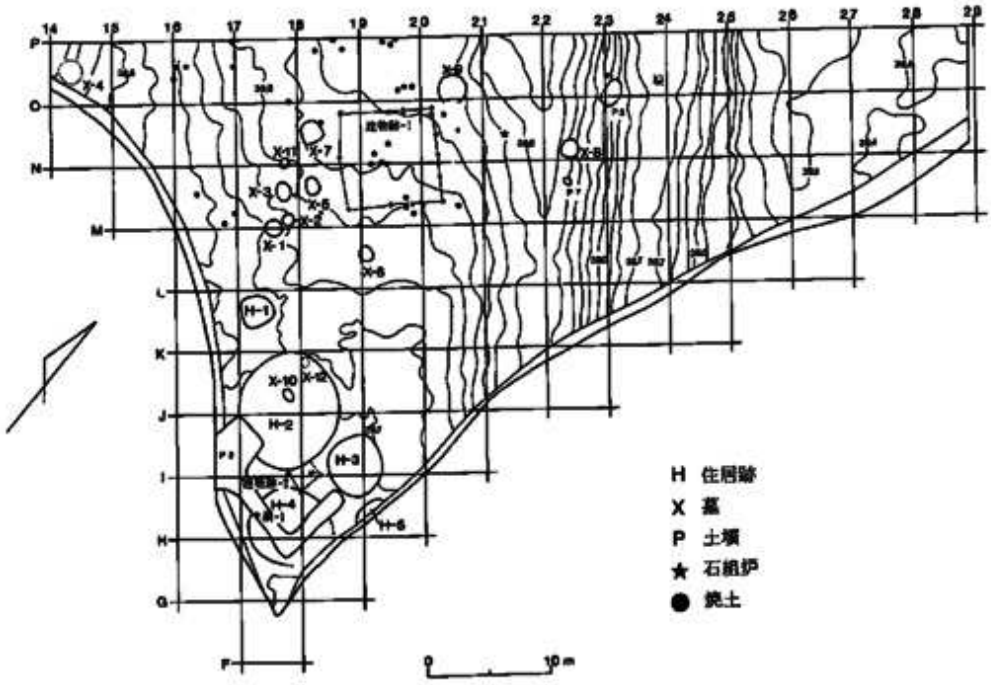
III層上部から出土した土器は、函館市西桔梗B2遺跡の出土資料に相当する恵山式土器の古い段階のものが主体である。石器には靴形石器、魚形石器などこの時期に特徴的な器種もある。

〈III層中・下部〉　III層の中ほどから下部にかけて竪穴住居跡、墓、土壙、壕、焼土が検出された。住居跡には縄文時代前期の縄文尖底土器が伴っている。墓や土壙も縄文尖底土器を伴うものが多い。壕は調査区北東部にあり、地表から沢状の凹地として認められた。凹地は崖ぎわから台地の奥に向かって調査区の外に延びており、約120mにわたって確認できる。壕の掘り込み面はIII層の中ほどで、底はV層まで達している。掘りあげた土は両側に盛られ、尾根状の高まりになっている。壕の深さは盛土の頂部から底まで約1m、幅は盛土の頂部間で約20mある。盛土の中から円筒土器上層式が出土していること、III層上部では恵山式土器の時期の安定した生活面が形成されていることから、壕の構築時期はこの間に求められるが、詳しい時期の特定については来年度以降の調査課題である。

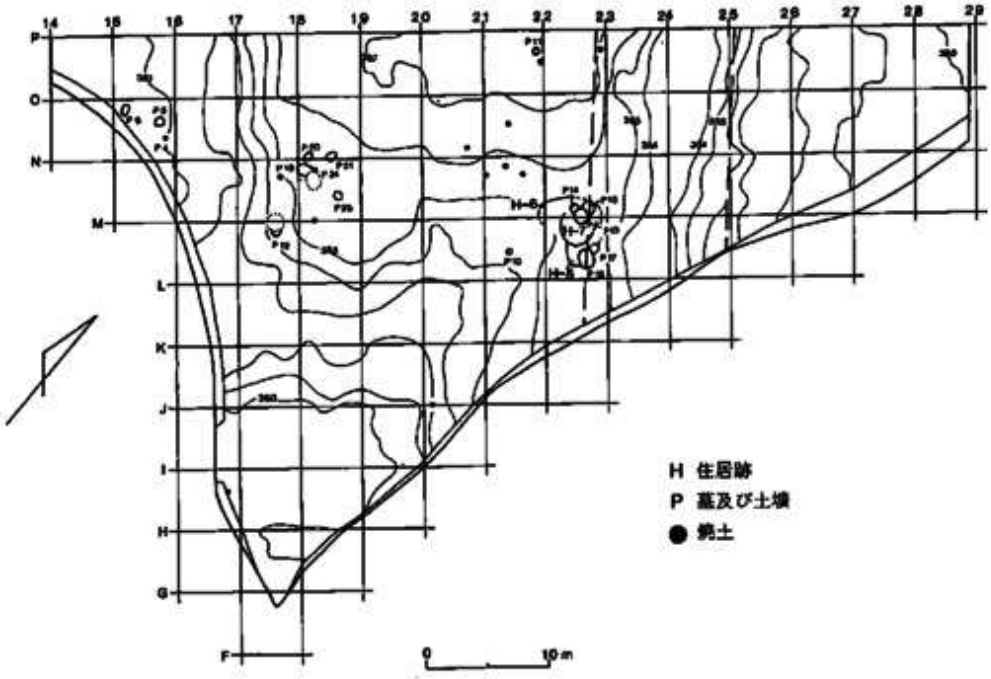
III層の中、下部から出土した土器には、縄文時代各時期のものがある。早期の土器は貝殻文土器、中茶路式、東釧路IV式である。前期の資料は多く出土しており、縄文尖底土器、胎土に繊維を多量に含む縄文の施された平底土器、円筒土器下層式などがある。中期の土器は円筒土器上層式が多く、ほかに大安在B式、ノダップII式に相当するものも少量みられる。後期の資料では余市式土器がややまとまって出土している。

遺構一覧

掘込み面	住居跡	墓	土　壙	石組炉	壕	建物跡	溝	焼　土
I　　層			2			2	1	1
II　　層	5	12	1	1				28
III層中・下部	3	5	11		1			11
計	8	17	14	1	1	2	1	40



Ⅰ層及びⅢ層上部の遺構位置図（等高線はⅢ層上面）



Ⅲ層中・下部の遺構位置図（等高線はⅤ層上面）

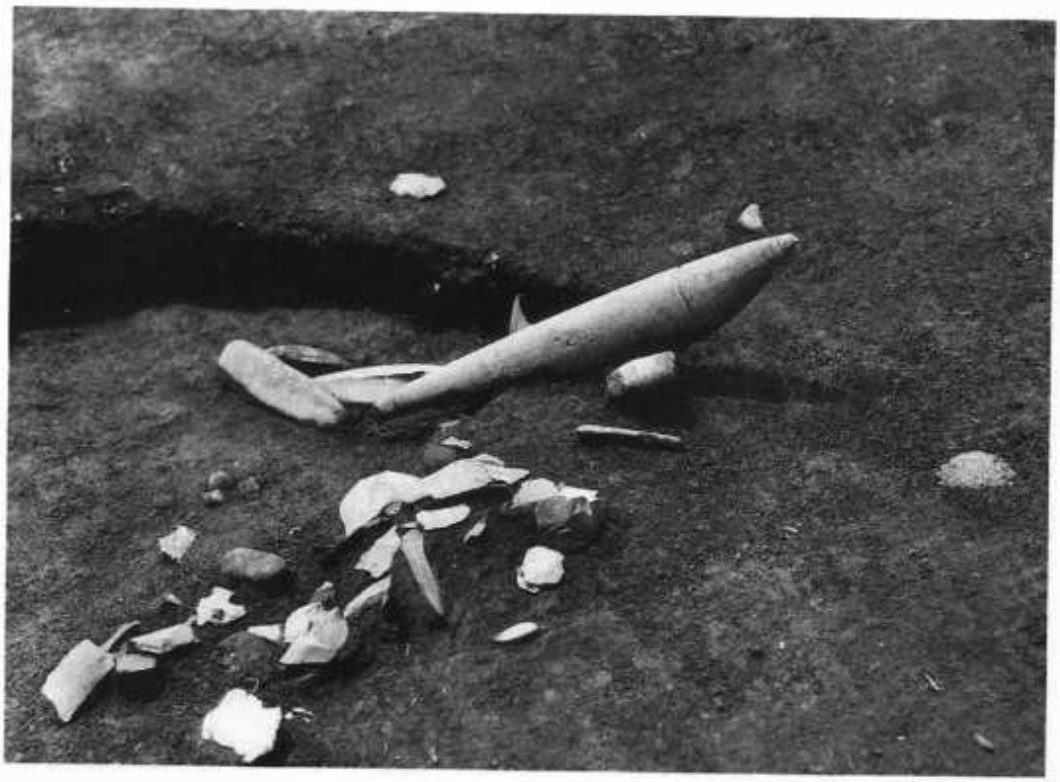
遺跡遠景

調査状況

竪穴住居跡（H-2）遺物出土状況

竪穴住居跡（H-2）調査状況

配石墓 X-1・2　遺物出土状況



土壙（P-7）魚形石器出土状況

壕　土層断面（P ライン）

(仮称) 国立療養所裏2遺跡

事 業 名：一般国道5号函館新道（自専道）工事用地内埋蔵文化財発掘調査

委 託 者：北海道開発局函館開発建設部

所 在 地：亀田郡七飯町字桜町 695-11

調査面積：2,925 m²

発掘期間：平成4年8月17日～10月27日

調 査 員：越田賢一郎、工藤研治、中田裕香

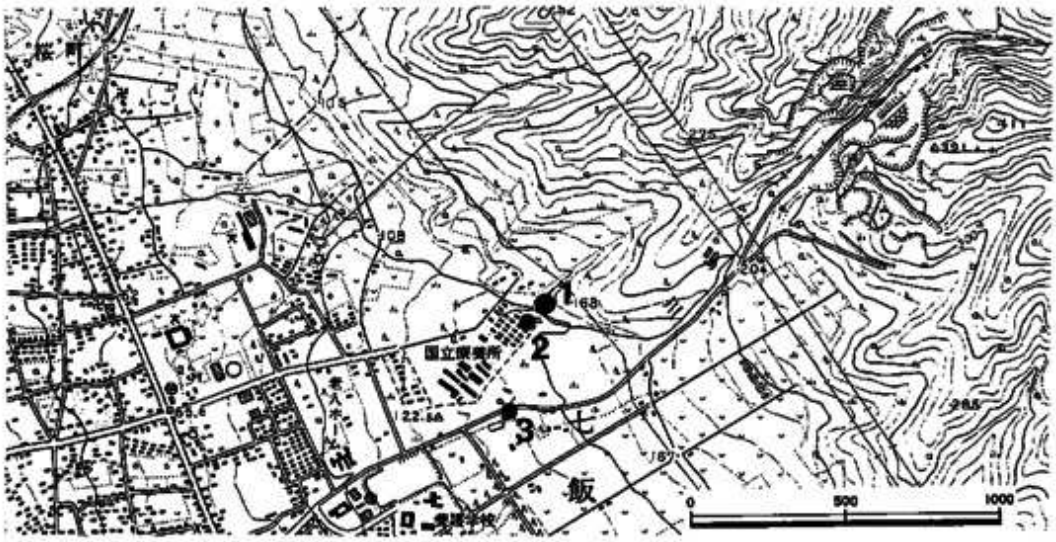
遺跡の概要

本遺跡はＪＲ七飯駅の北東約2 km、久根別川の支流である鳴川が形成した扇状地の扇頂付近から丘陵先端部に立地している。鳴川の対岸には国立療養所裏遺跡がある。

調査対象面積は約8,000 m²、今年度は西側の部分を調査した。調査区の標高は142～156 m、東から西へ向かって傾斜し、とくにNラインからＯラインにかけては急斜面になっている。調査区が山林であることから、発掘に先立って重機を使用して表土の除去と抜根を行った。

土層は上位からⅠ層（表土）、Ⅱ層（火山灰およびその風化土壌）、Ⅲ層（黒色土 ― 遺物包含層）、Ⅳ層（漸移層）、Ⅴ層（地山）に分けられる。丘陵先端部では風倒木痕が多数確認された。Ⅱ層の火山灰は、灰白火山灰（Ko-d）と黄橙色火山灰（白頭山 ― 苫小牧火山灰、B-Tm）の2種があり、部分的に堆積している。Ｏライン以南では、Ⅲ層の下に褐色砂と黒褐色土が互層になっており、黄褐色火山灰（Ko-g と考えられる）も堆積している。砂層からは流れこんだものと思われる遺物がごくわずか出土した。この下層には鳴川が運んできた巨礫がほぼ一面に堆積している。

遺構と遺物の分布は、18ライン以東で濃くなっており、遺跡の主体部は来年度以降の調査予定区にあると考えられる。

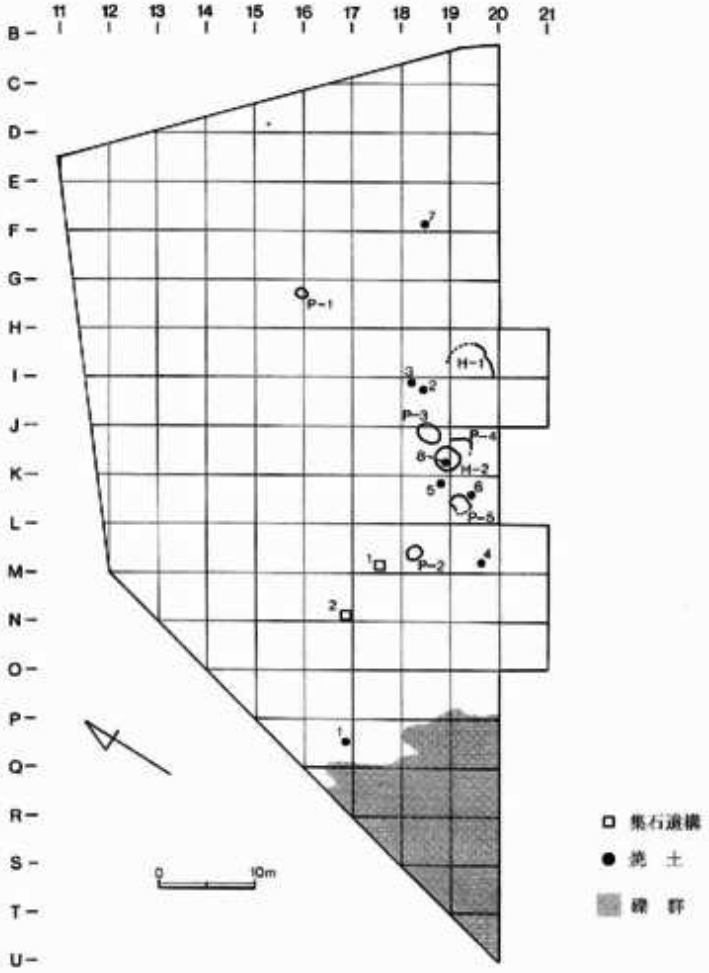


遺跡の位置（1．国立療養所裏2遺跡，2．国立療養所裏遺跡，3．鳴川遺跡）

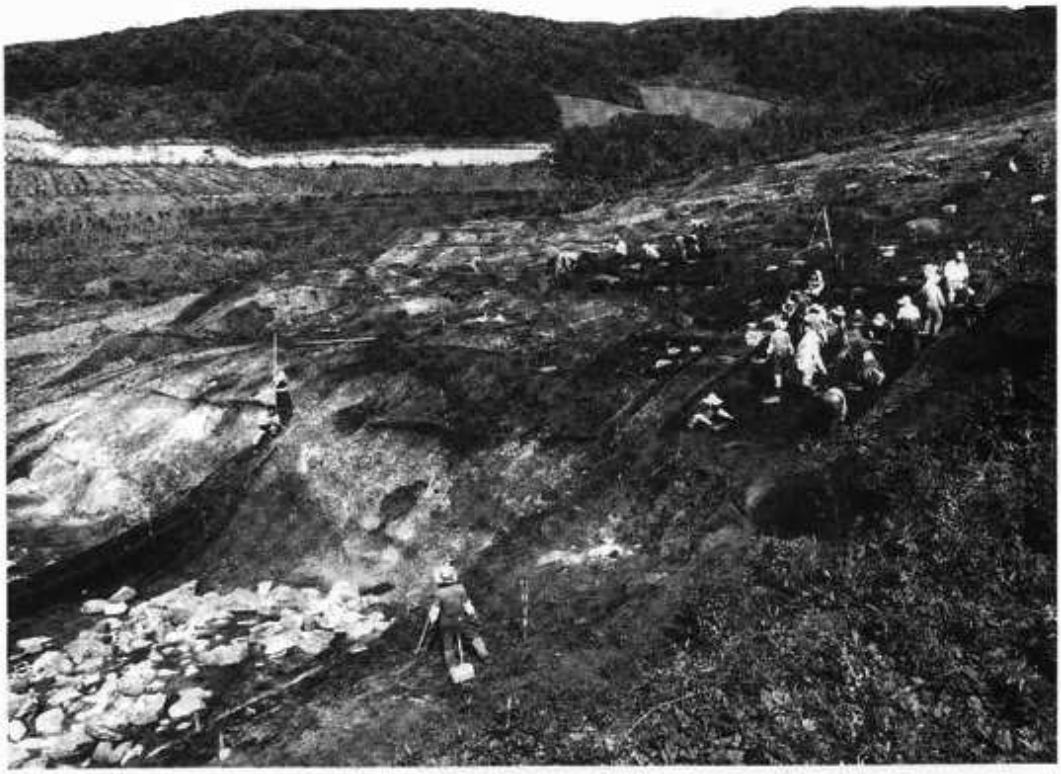
遺構と遺物

検出された遺構は、竪穴住居跡2軒、土壙5基、集石遺構2ヵ所、焼土8ヵ所であり、傾斜の緩やかな部分に分布している。焼土以外の遺構はIII層中から掘り込まれている。住居跡のうち、H－1は風倒木痕などのため平面形や規模が不明である。H－2は平面形が円形で径約2.5mと小型である。土壙の平面形や規模は様々である。焼土はIII層の上部で検出されている。土器片が周囲からまとまって出土したものもあり、掘り込みは確認されなかったが、生活面の存在を想定できる。これらの住居が構築された時期は縄文時代中期前半であろう。

遺物の点数は約11,600点である。このうち約95%が土器片で、フレイク・チップは約0.9%と極めて少ない。土器は、縄文時代中期のサイベ沢V式からサイベ沢VIIa式が主で、前期の円筒土器下層d式などもみられる。石器類は、台石、石皿、すり石などの礫石器が多く、土偶、石棒、垂飾も出土している。丘陵先端部から出土した大型の礫は鳴川の川床から運び上げられたものと思われる。



遺構位置図



調査状況

調査状況

竪穴住居跡（H-2）

土壙（P-3）

遺物出土状況

滝里11遺跡　滝里32遺跡　滝里33遺跡

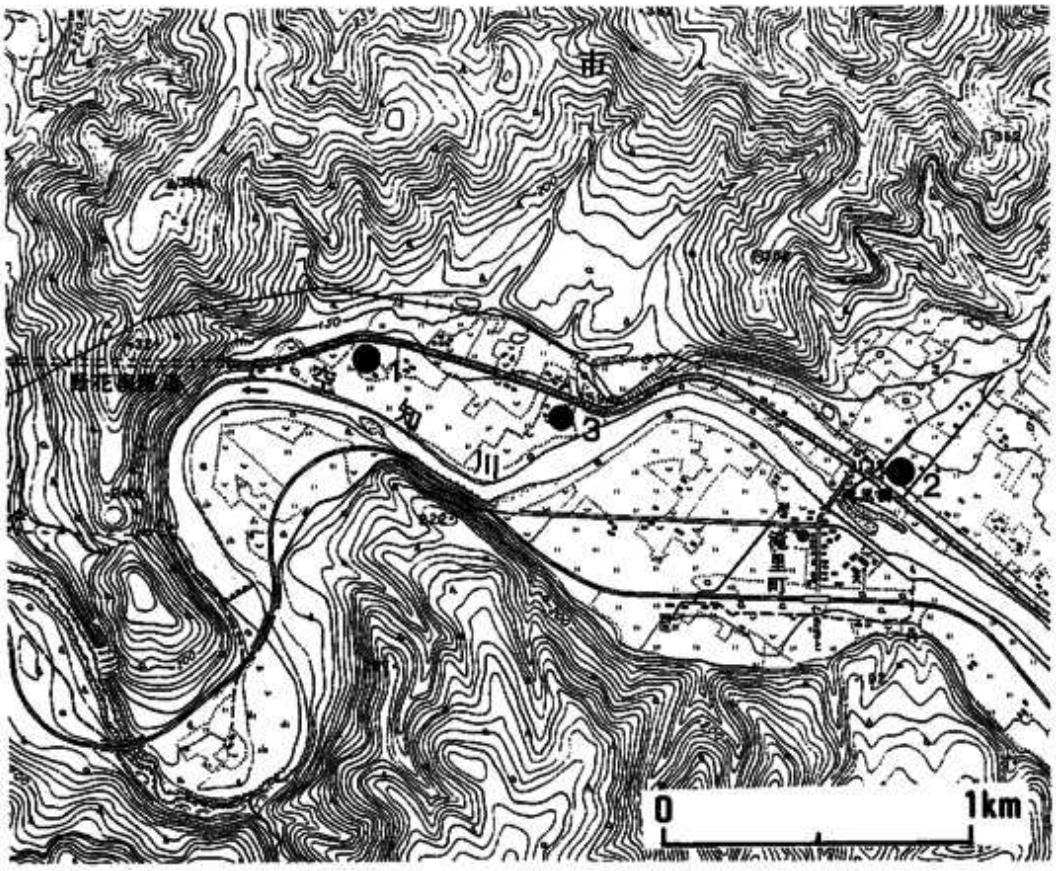
事 業 名：石狩川水系滝里ダム建設事業用地内埋蔵文化財発掘調査

委 託 者：北海道開発局石狩川開発建設部

発掘期間：平成4年5月6日～10月22日

調 査 員：佐川俊一、葛西智義、森岡健治

滝里ダム建設工事に伴い発掘調査あるいは工事立会を必要とする遺跡は30ヵ所以上に及んでいる。これらの遺跡は空知川によって形成された谷あいの段丘上にあり、ダム建設によって水没することになる。調査は平成元年度から始まり、本年度までに7遺跡について発掘を行った。今回、調査した3ヵ所の遺跡はいずれも空知川右岸の低位段丘面に分布する遺跡であり、上流側から順に滝里32遺跡、滝里33遺跡、滝里11遺跡が位置している。標高は130mから140m。いずれの遺跡も調査前まで水田や畑、あるいは宅地などとして利用されていたところで、遺構、遺物の保存状態はあまり良好ではない。以下、各遺跡ごとに概要を記す。



遺跡の位置（1．滝里11遺跡，2．滝里32遺跡，3．滝里33遺跡）

滝里11遺跡（E－04－14）

所 在 地：芦別市滝里町244-1　調査面積：1,300 m²

遺跡の概要

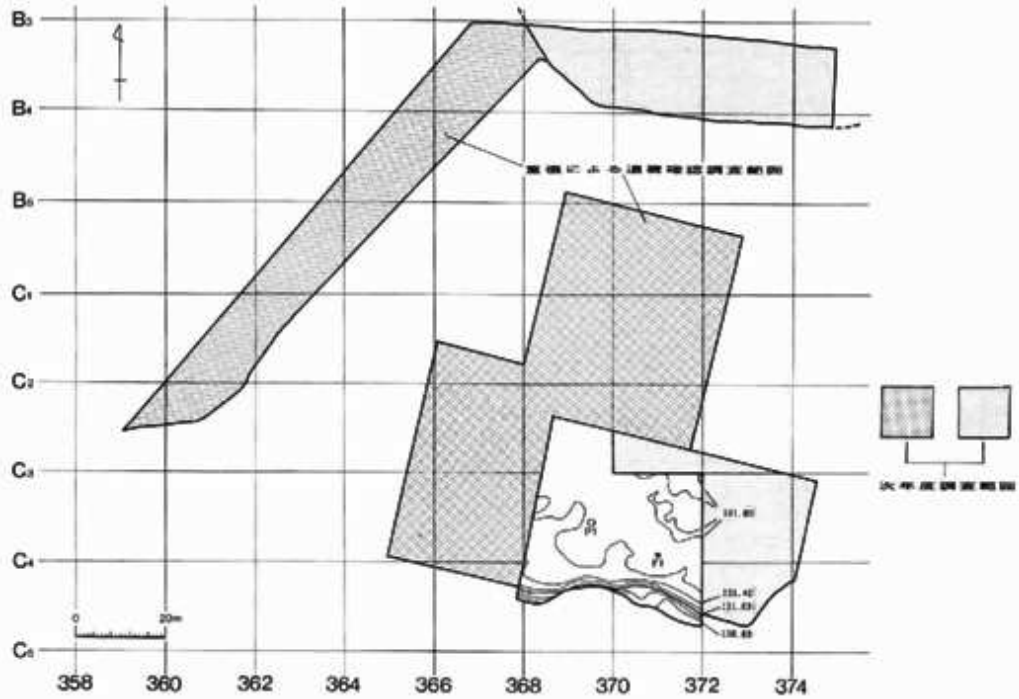
本遺跡は標高約130 mの低位段丘上に立地している。南北に分かれた調査対象範囲7,000 m²のうち、本年度は南側の1,300 m²を調査した。ダム建設決定前はおもに宅地、畑として利用されていたところである。遺跡の範囲は現在の地形を考慮して決定されているが、重機による表土除去後に確認された旧地形とは多少のずれを生じ、最終的な調査範囲は当初予定よりも、やや南側に張出す結果となった。

遺構と遺物

遺構は土壙と焼土がひとつずつ検出された。土壙の覆土には少量の炭化物とフレイク・チップが含まれていた。

出土遺物はおよそ2000点、大半がⅠ層（耕作土）から出土している。フレイク類が最も多い。土器片は少数で、その多くは磨滅している。特徴の明瞭なものには縄文時代前期と晩期のものがみられた。石器では石斧が目立つ。異形石器も出土している。今年度の調査結果については、全調査対象範囲の発掘終了後に報告する予定である。

異形石器



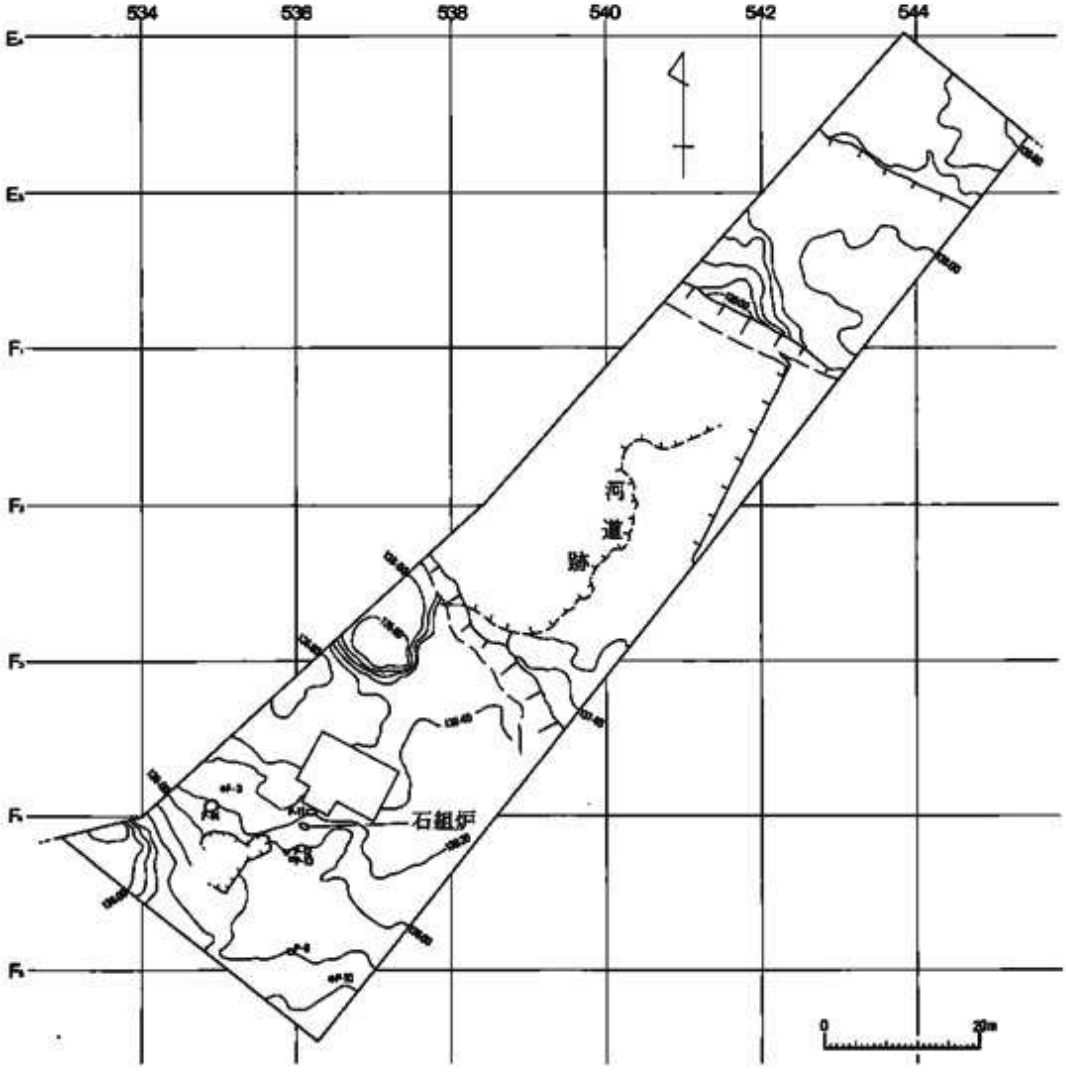
遺構位置図

滝里32遺跡（E－04－80）

所 在 地：芦別市滝里町 321,322　　調査面積：4,060 m²

遺跡の概要

滝里32遺跡の全調査対象面積は14,850 m²、昨年度はこのうち全体の約⅔にあたる9,929 m²を調査した。今年度の調査区は本遺跡の北西縁を流れて空知川に注ぐポンルペシュペ川と昨年度調査区に挟まれた部分である。地形は空知川に向かって低くなっており、昨年度調査区から続く4段の面がある。国道に近い最も低い面は、宅地や畑として利用されていたが、これより上の3面は昭和40年代に大規模な造田工事が行われた所で、とくに遺跡の保存状態が良くない。遺物は耕作土中にもあるが、昨年度調査区と同様にポンルペシュペ川が削ったと思われる、低い部分の遺物包含層から多く出土した。



遺構位置図

遺構と遺物

検出した遺構は土壙6基（P−9〜14）、石組炉1基、焼土1ヵ所（F−3）である。いずれも最も低い面にある。土壙の平面形は円形（P−12）と、楕円形（P−9〜14）がある。確認された規模は径が0.45 m〜0.6 m、深さは0.05 m〜0.45 mである。P−11の覆土上部からは、縄文時代晩期後葉の小型土器が倒立した状態で1個体出土した。石組炉は拳大より大きめの礫を長方形状に配したもので、規模は1.3×0.7 mである。石組の内側から縄文晩期の土器片が出土した。石は焼けた痕跡があり、形態からも炉跡と考えられるが、焼土は検出されていない。

出土した遺物の総点数は約63,300点。内訳は土器片が約22,200点、石器約3,500点、フレイク・チップが約37,600点である。土器片には縄文時代前期〜晩期、続縄文時代および擦文時代のものがあるが、縄文時代晩期のものが主体を占める。石器は石鏃、石槍、スクレイパーなどの剥片石器が多い。礫石器には石斧がある。

調査状況

遺物出土状況

土壙（P-11）土器出土状況

滝里33遺跡（E－04－81）

所 在 地：芦別市滝里町274-8　　調査面積：7,400 m²

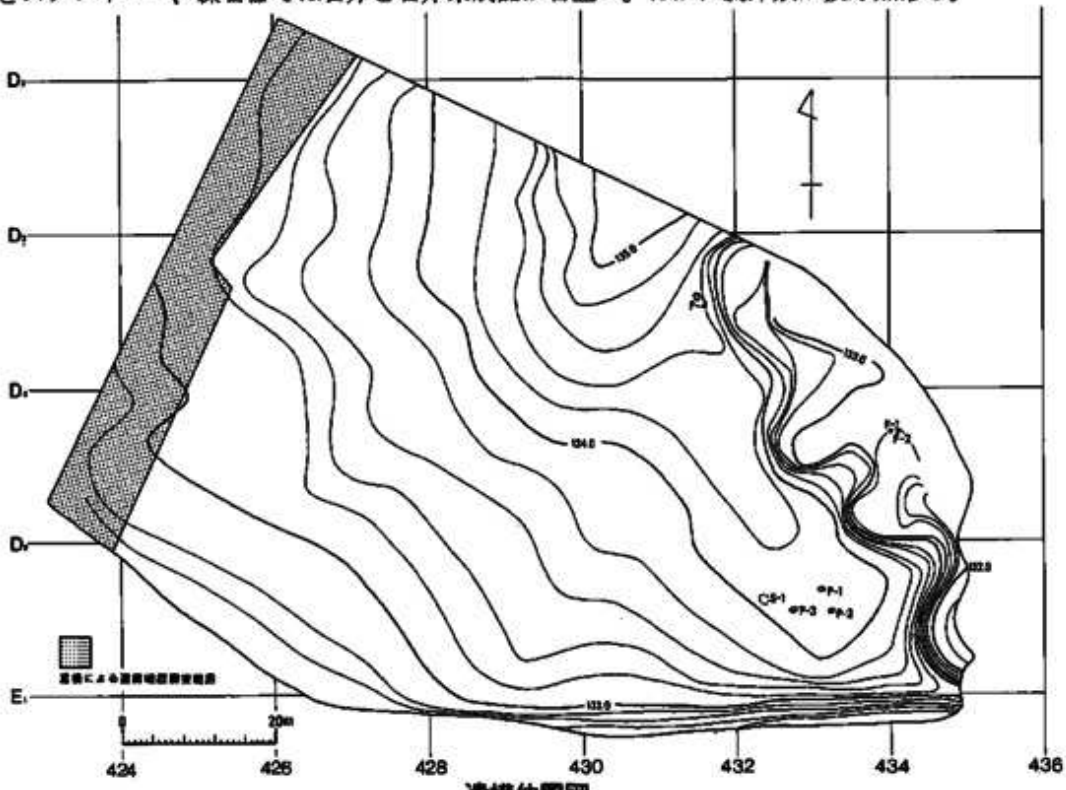
遺跡の概要

本遺跡は標高132～135 mの低位段丘上に立地している。現況は葦や柳などが生えた荒れ地であるが、数年前までは畑地として利用されていた。このため、遺物包含層は大部分が耕作によって攪乱されており、プライマリーな層はわずかしか存在していない。調査面積は当初7,000 m²を予定していたが、調査区東側に沢が入り組んでおり、最終的には7,400 m²となった。

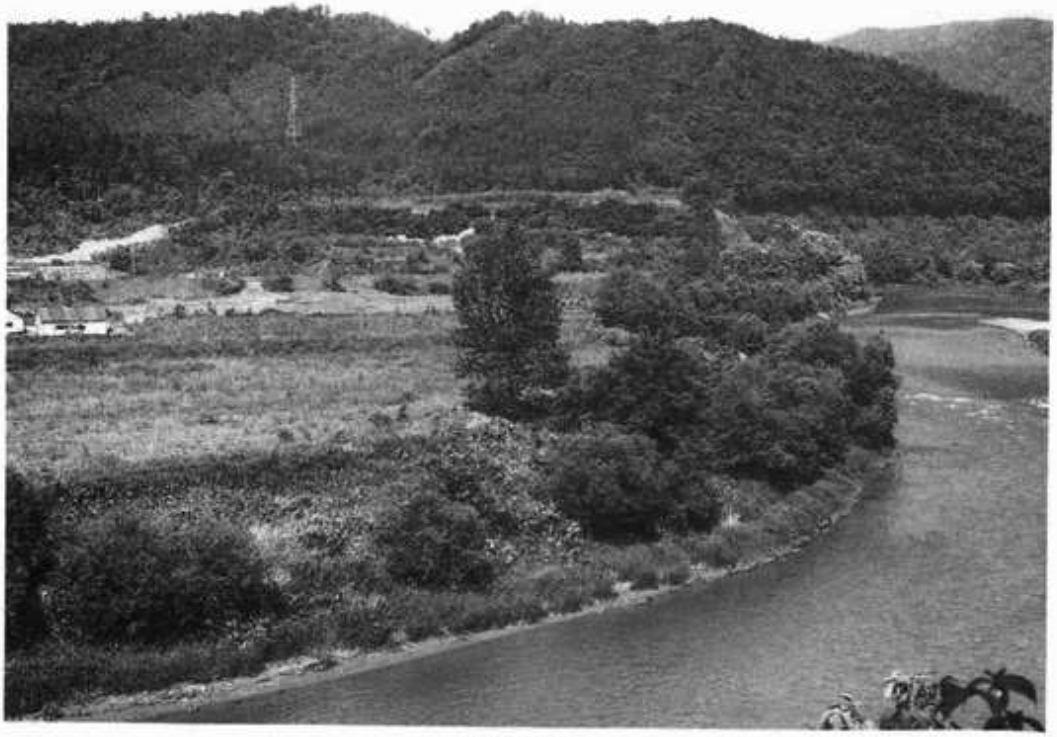
遺構と遺物

検出された遺構は土壙が4基、焼土2ヵ所および礫の集中地点1ヵ所である。P－1と4は遺物を伴っている。土壙P－1は下半部しか確認されなかったものの、コハク製の平玉が875点（破片を含む）出土した。上部は耕作によって乱されているが、コハク玉の一部は耕作土からもみつかっている。周辺からは続縄文時代の字津内IIa式の特徴をもつ土器が1個体出土している。P－4ではロ縁部を欠失した縄文時代晩期の深鉢が1個体検出された。焼土は2ヵ所とも沢によって一段低くなった地点で確認された。いずれも屋外炉であろう。F－1は検出状況からみて石組炉の可能性があり、上面から縄文時代晩期の土器片が50点あまり出土している。

出土遺物のうち土器片は約7,700点である。早期を除く縄文時代各期と続縄文時代のものがあるが、大部分は縄文時代晩期のものである。石器は約2,400点出土した。剥片石器では石鏃とスクレイパー、礫石器では石斧と石斧未成品が目立つ。ほかに剥片類が数万点ある。



遺構位置図



遺跡遠景

土壙（P-1）コハク玉出土状況

土壙（P-4）土器出土状況

オサツ2遺跡（A－03－14）

事 業 名：都地区道営畑地帯総合土地改良事業用地内埋蔵文化財発掘調査

委 託 者：北海道石狩支庁

所 在 地：千歳市都268－1地先

調査面積：870 m²

発掘期間：平成4年8月1日～10月29日

調 査 員：鬼柳　彰、田才雅彦、鎌田　望

遺跡の概要

本遺跡は千歳川の支流、長都川右岸の段丘上平坦面に立地する擦文時代の集落跡として、古くから知られていた。今回の調査にあたっては、川岸の低湿地部にも遺物包含層の存在が想定されたため、2ヵ所の湾入部にトレンチを設定して遺構と遺物の確認を行った。

遺構と遺物

〈旧石器時代〉 2・6区のⅥ層上部でスポットを確認した。また、土壙P－2からピュアリン、ピエス・エス・キーユ、石斧未成品などが出土しており、この遺構も旧石器時代に属する可能性がある。

〈縄文時代〉 検出された遺構は中期（P－3）および時期不明の土壙（P－1・4）とTピット4基のほか焼土がある。遺物は大半が中期のもので後期のものもわずかにみられる。

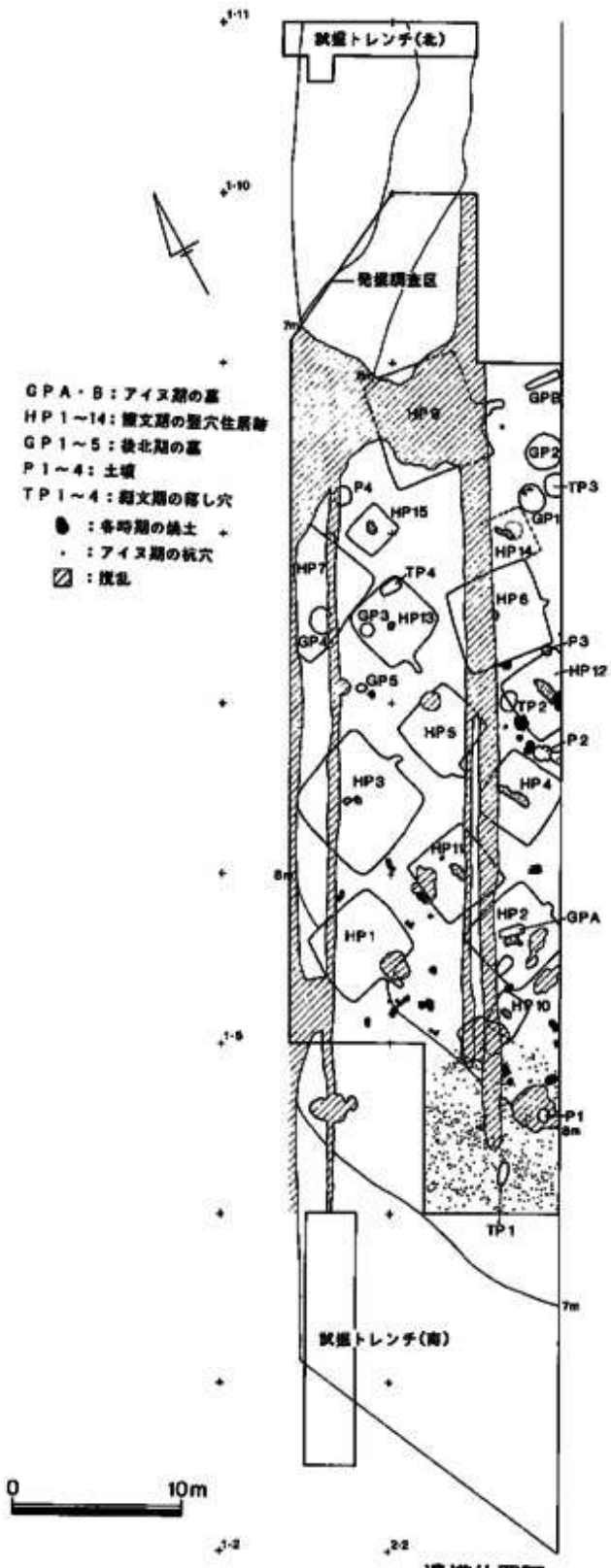
〈続縄文時代〉 土壙墓5基を調査した。壙底から後北B式土器、石斧のほか大量の石鏃が出土している。このうち2基は擦文時代の竪穴住居によって、上部が削平されている。

〈擦文時代〉 竪穴住居跡14軒を調査した。白頭山－苫小牧火山灰のありかたなどから、ほぼ三時期に分かれるものと思われる。炭化材がのこる住居跡が多く、HP－9からは屋根を葺いたものと思われる炭化したカヤが検出されている。なお、HP－10・13・14はその規模から、仮小屋的なものと思われる。このほかに焼土と杭穴が多数あるが、アイヌ文化期の遺構との区分はまだできていない。遺物は多くの擦文式土器のほか、紡錘車、石器、鉄製品、玉などがある。

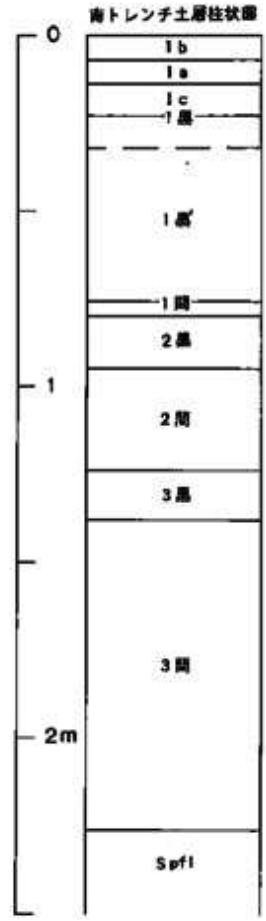
〈アイヌ文化期〉 遺構には土壙墓2基、焼土のほか多数の杭穴がある。遺物には土壙墓GP－Aから出土した木椀と思われるウルシ皮膜、GP－Bから出土したナタ、カマのほか刀子、舟釘、鍋などの鉄製品がある。

低湿地部のトレンチから出土した遺物には縄文時代中期、後期、擦文時代の土器片および擦文時代、アイヌ文化期の木製品がある。木製品には、櫂、構造材、タカマジ、タカマ、花矢、中柄、銛先、杭などがあり、ほかに樺皮の火口や樹皮製の紐なども出土した。

遺跡の位置（1:35,000）

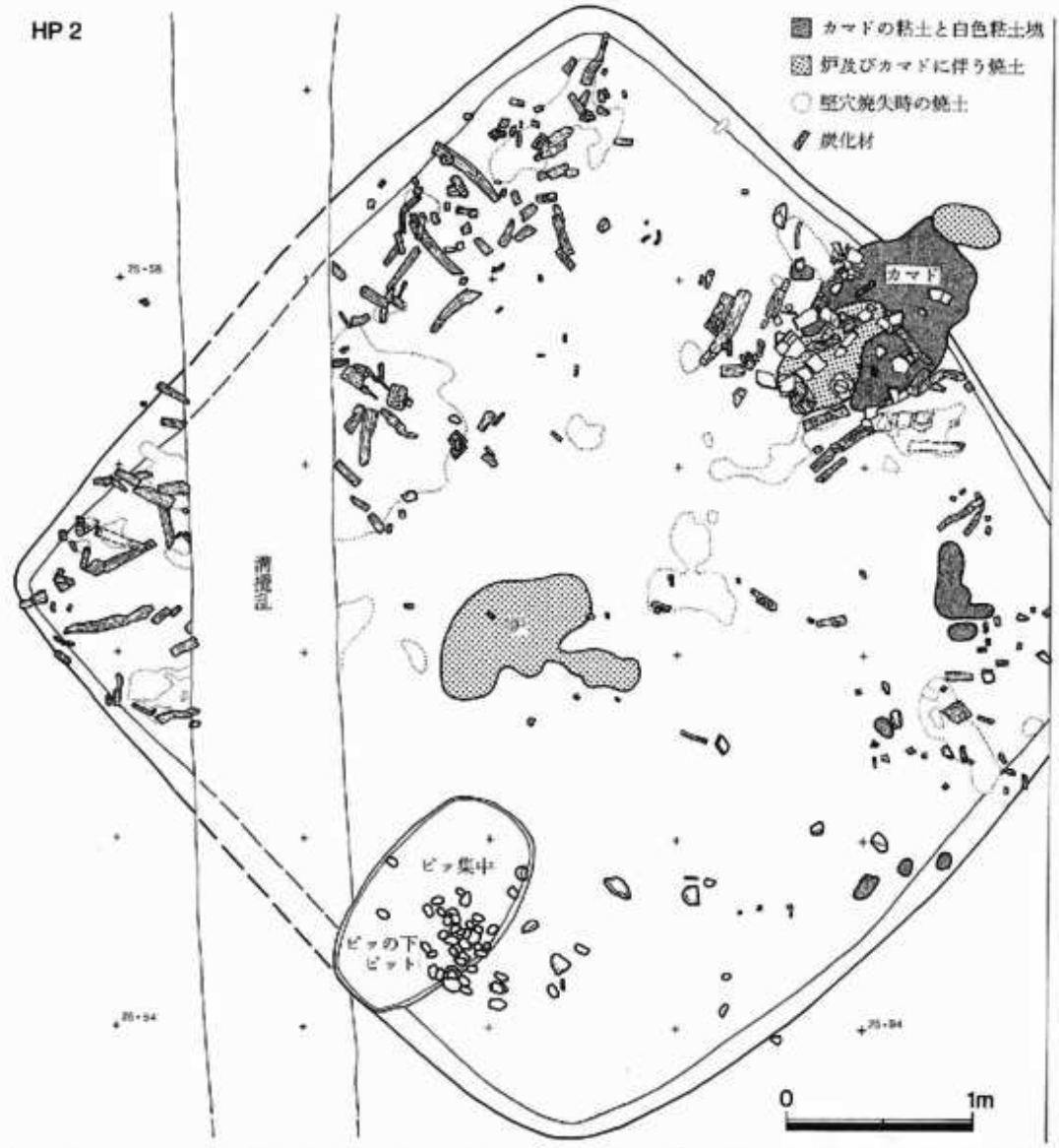


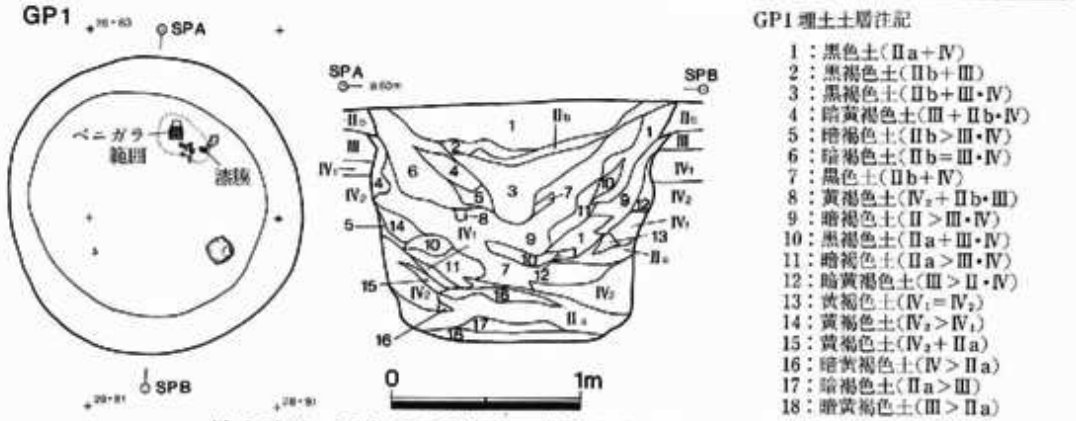
遺構位置図



土層
段丘部の基本層位
a：Ta-a火山灰(1739年降灰)
IIa：Ta-b火山灰(1667年降灰)を含む黒色土
IIb：黒色土～黒褐色土
III：暗黄褐色土
IV_1：黄褐色土
IV_2：黄褐色大粒火山灰

南トレンチの土層
Ia：黒褐色～暗灰色粘土
Ib：灰白色粘土
Ic：IaとIbの互層、主としてIbでIaが縞状に3～5本入る
1黒：段丘上のIIa、黒色で草本を若干含む
1黒'：段丘上のIIa、黒色で草本を多量に含む
1間：黄褐色を呈す、草本とTa-c_2層
2黒：段丘上のIIb、黒色で草本を若干含む
2間：暗黄褐色を呈す、樹本と草本が：大半を占める
3黒：段丘上のIIb、黒色で草本を若干含む
3間：暗黄褐色を呈す樹本と草本が：大半を占める
Spfl：支笏降下軽石層



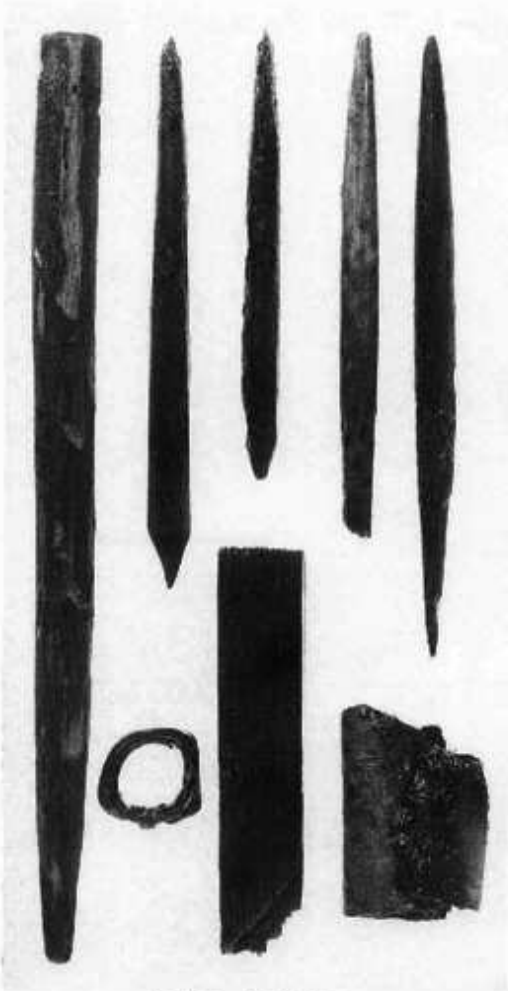


GP1 埋土土層注記

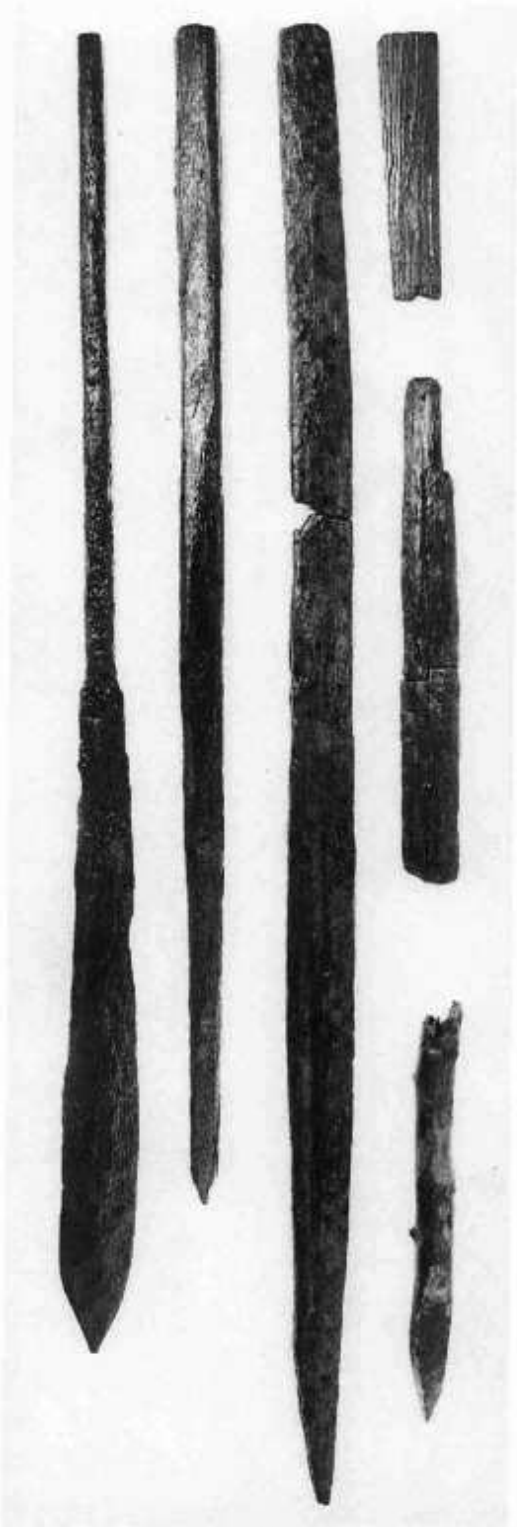
1：黒色土（Ⅱa＋Ⅳ）
2：黒褐色土（Ⅱb＋Ⅲ）
3：黒褐色土（Ⅱb＋Ⅲ・Ⅳ）
4：暗黄褐色土（Ⅲ＋Ⅱb・Ⅳ）
5：暗褐色土（Ⅱb＞Ⅲ・Ⅳ）
6：暗褐色土（Ⅱb＝Ⅲ・Ⅳ）
7：黒色土（Ⅱb＋Ⅳ）
8：黄褐色土（$Ⅳ_2$＋Ⅱb・Ⅲ）
9：暗褐色土（Ⅱ＞Ⅲ・Ⅳ）
10：黒褐色土（Ⅱa＋Ⅲ・Ⅳ）
11：暗褐色土（Ⅱa＞Ⅲ・Ⅳ）
12：暗黄褐色土（Ⅲ＞Ⅱ・Ⅳ）
13：黄褐色土（$Ⅳ_1$＝$Ⅳ_2$）
14：黄褐色土（$Ⅳ_2$＞$Ⅳ_1$）
15：黄褐色土（$Ⅳ_2$＋Ⅱa）
16：暗黄褐色土（Ⅳ＞Ⅱa）
17：暗褐色土（Ⅱa＞Ⅲ）
18：暗黄褐色土（Ⅲ＞Ⅱa）

擦文時代の竪穴住居跡（上），続縄文時代後北Ｂ式期の墓（下）

墓（GP-1）出土 後北B式土器



木製品・樹皮製品



木 製 品

調査状況

墓（GP-2）土器出土状況

竪穴住居跡（HP-6）

カマド付近土器出土状況（HP-6）

鎌出土状況（HP-1）

木製品出土状況

北明1遺跡（L－08－48）

事 業 名：北海道横断自動車道埋蔵文化財発掘調査

委 託 者：日本道路公団札幌建設局

所 在 地：河西郡芽室町北明西4線5番地4ほか

調査面積：7,200 m²

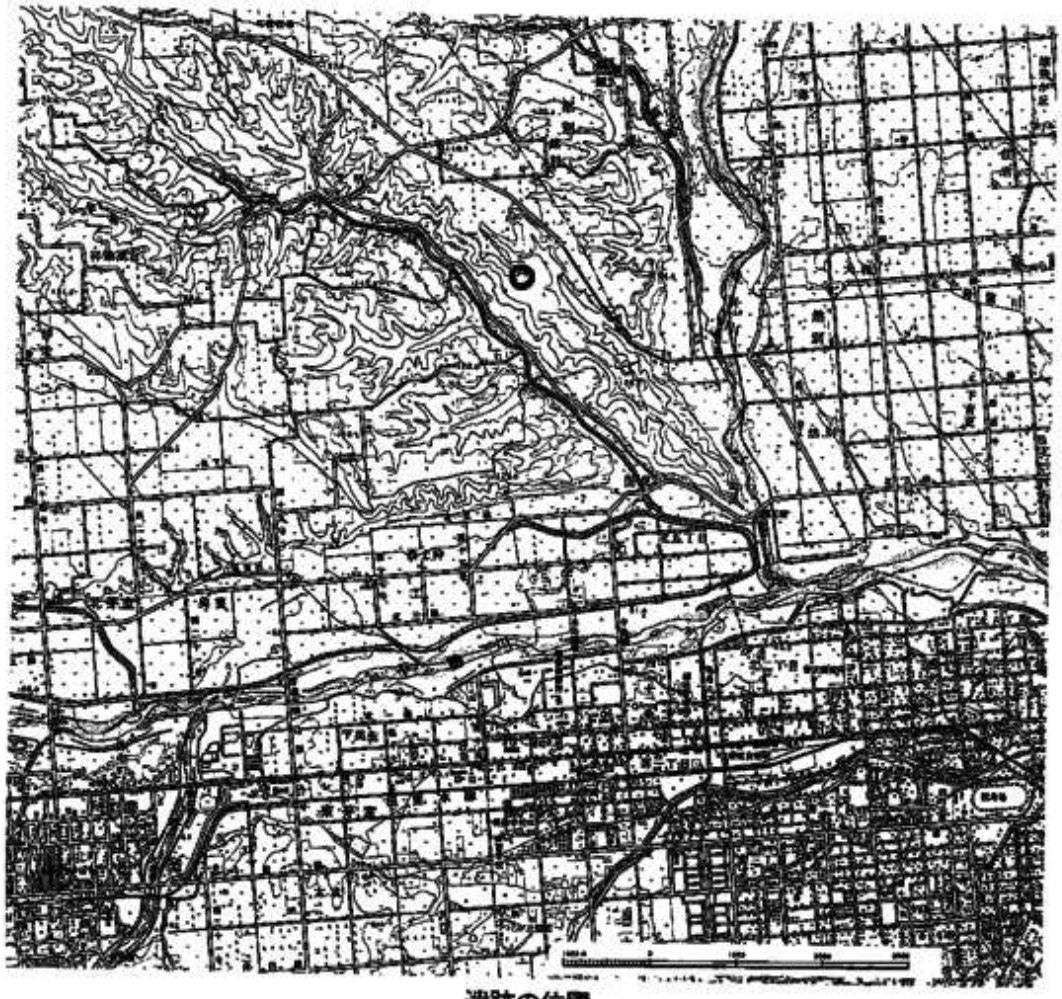
発掘期間：平成4年9月17日～10月30日

調 査 員：西田　茂、熊谷仁志、立川トマス

遺跡の概要

本遺跡は芽室町市街の北東約7km、十勝地方では最も古い段丘面（光地園面）上に立地している。段丘は開析がすすみ北西－南東方向に延びる丘陵状をなしている。調査区域は丘頂の平坦部にあたる。標高は137m～139m。道路用地になる前はおもに畑地として利用されていた。

昨年度の調査成果に基づき、Tピットの検出が予想されるところを中心にして調査を行った。

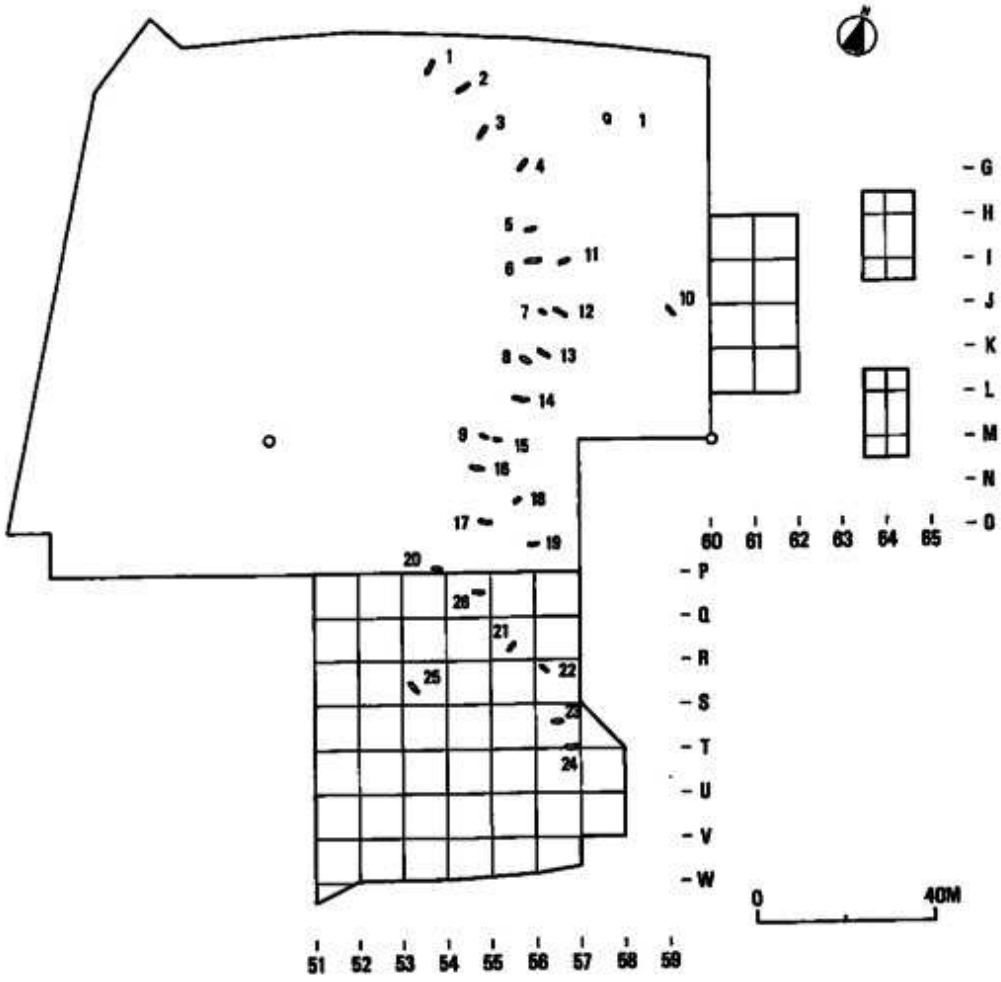


遺跡の位置

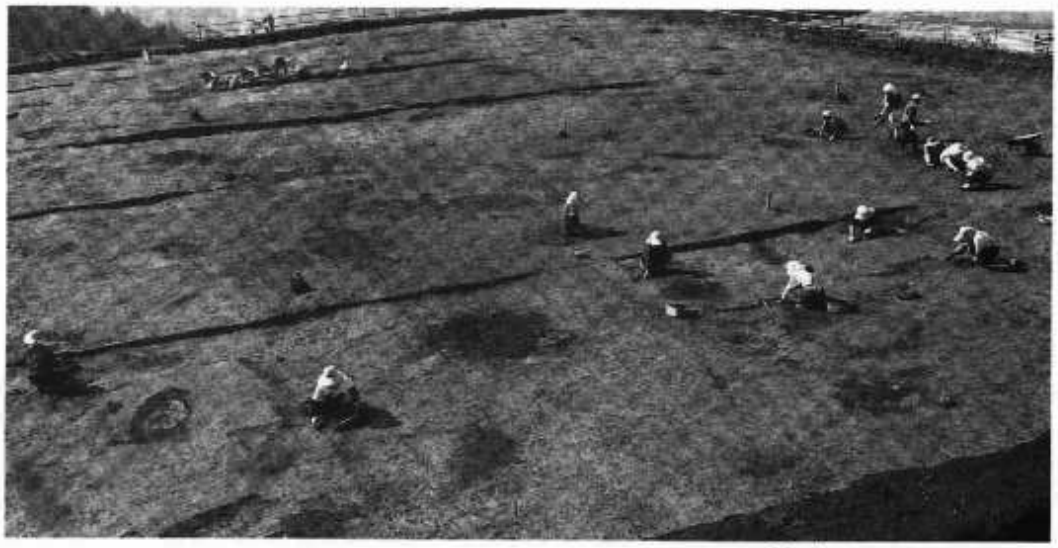
遺構と遺物

検出された遺構はＴピット６基である。これらのＴピットには、昨年度の調査で検出されたＴピット列に並ぶ位置にあるものもみられる。昨年度の調査では長軸方向の両端壁が同じ方向に、大きく傾斜したＴピットが発掘された。今回もこれに類似する例が検出されたことから精査を行った。また、壁に掘削した道具の痕跡がみられることなど、当時の掘削方法を推定するための良好な手がかりも得られた。

遺物は土器片、石器、剝片など計 198 点である。土器片は、縄文時代中期のモコト式土器１個体分と後期中葉のものが３点である。石器には石鏃、槍先またはナイフ、スクレイパーなどがある。

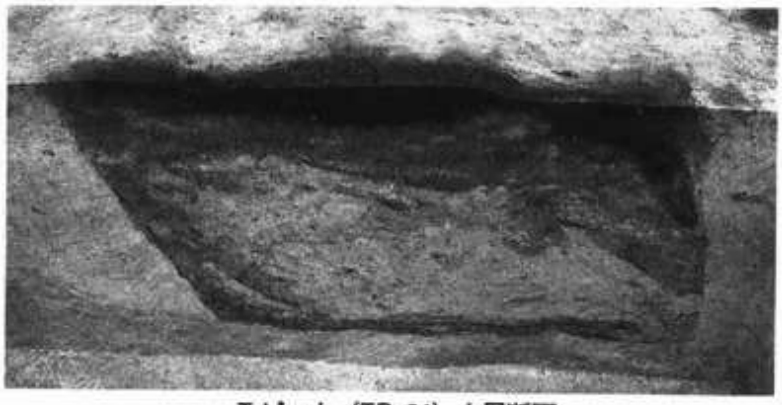


遺構位置図



▲調査状況

◀Tピット（TP-24）確認状況



Tピット（TP-24）土層断面

西昭和2遺跡（L－02－78）

事 業 名：北海道横断自動車道埋蔵文化財発掘調査

委 託 者：日本道路公団札幌建設局

所 在 地：河東郡音更町字東和西1線7番地1ほか

調査面積：2,510 m²

発掘期間：平成4年5月6日～6月24日

調 査 員：西田　茂、熊谷仁志、立川トマス

遺跡の概要

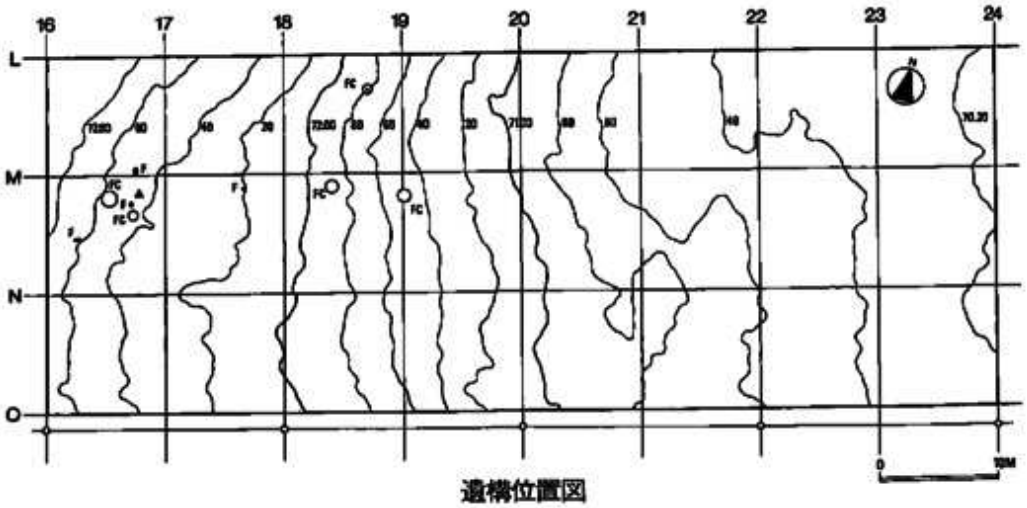
西昭和2遺跡は音更市街の南東約2.5 km、南流する音更川の東側段丘上に立地している。調査区は段丘崖の埋没斜面部にあたる。標高は70 m～74 m、西高東低のゆるやかな傾斜地である。道路用地になる前は、おもに畑地として利用されていた。

試掘調査の成果にもとづき、遺物の検出が予想されるところを中心にして調査した。

遺構と遺物

焼土3ヵ所と黒曜石剝片の集中地点6ヵ所を検出した。出土遺物は土器片、石器、フレークなど計16,000点あまり。土器が北筒II式であることから、すべて縄文時代中期末葉の遺構、遺物と考えられる。調査区西端部では110点の黒曜石製石器が径20 cmほどの範囲にまとまって出土した（下図▲印）。器種は槍先またはナイフ、スクレイパーに限られ、刃部に使用の痕跡がほとんどなく、周辺に黒曜石のフレーク・チップが集中していることからも、ここで作られたものと推定される。

◀遺跡の位置



遺構位置図

調査状況

まとまって出土した黒曜石石器

十日川5遺跡（L－15－51）

事 業 名：北海道横断自動車道埋蔵文化財発掘調査

委 託 者：日本道路公団札幌建設局

所 在 地：中川郡池田町字信取247番地1ほか

調査面積：2,470 m²

発掘期間：平成4年6月25日～9月16日

調 査 員：西田　茂、熊谷仁志、立川トマス

遺跡の概要

十日川5遺跡は池田町市街地の北7.5 Km、利別川に注ぐ十日川右岸の河岸段丘上にある。調査区は西から東にゆるやかに傾斜する段丘の縁辺に立地している。標高は約32～36 m。道路用地になる前は、牧草畑や豆畑として利用されていた。

試掘調査の結果から当初は、西側部分を手掘り調査範囲、東側部分を重機による遺構確認範囲と計画していた。しかし、斜面上部の西側部分は耕作が地山まで及んでいるが、東側部分では遺物包含層が良好に残されていることが判明したため、調査方法を途中から変更して発掘作業をすすめた。

土層は、Ⅰ層（耕作土）、Ⅱ層（黒色土）、Ⅲ層（灰白色火山灰）、Ⅳ層（黒色土）、Ⅴ層（黄褐色火山灰：Ta－d）、Ⅵ層（暗黄褐色粘質土）、Ⅶ層（地山：上部は黄褐色砂質土、下部は黄褐

遺跡の位置（●印）

色粘質土）の順に堆積している。II層の上半からは続縄文時代、IV層からは縄文時代早期～晩期の土器、石器が出土した。III層、V層の火山灰は段丘崖の縁辺に沿って、部分的に認められた。VI層以下では遺物が出土していないが、VII層の地山の礫に混じって拳大の黒曜石礫が少しみつかっている。

遺構と遺物

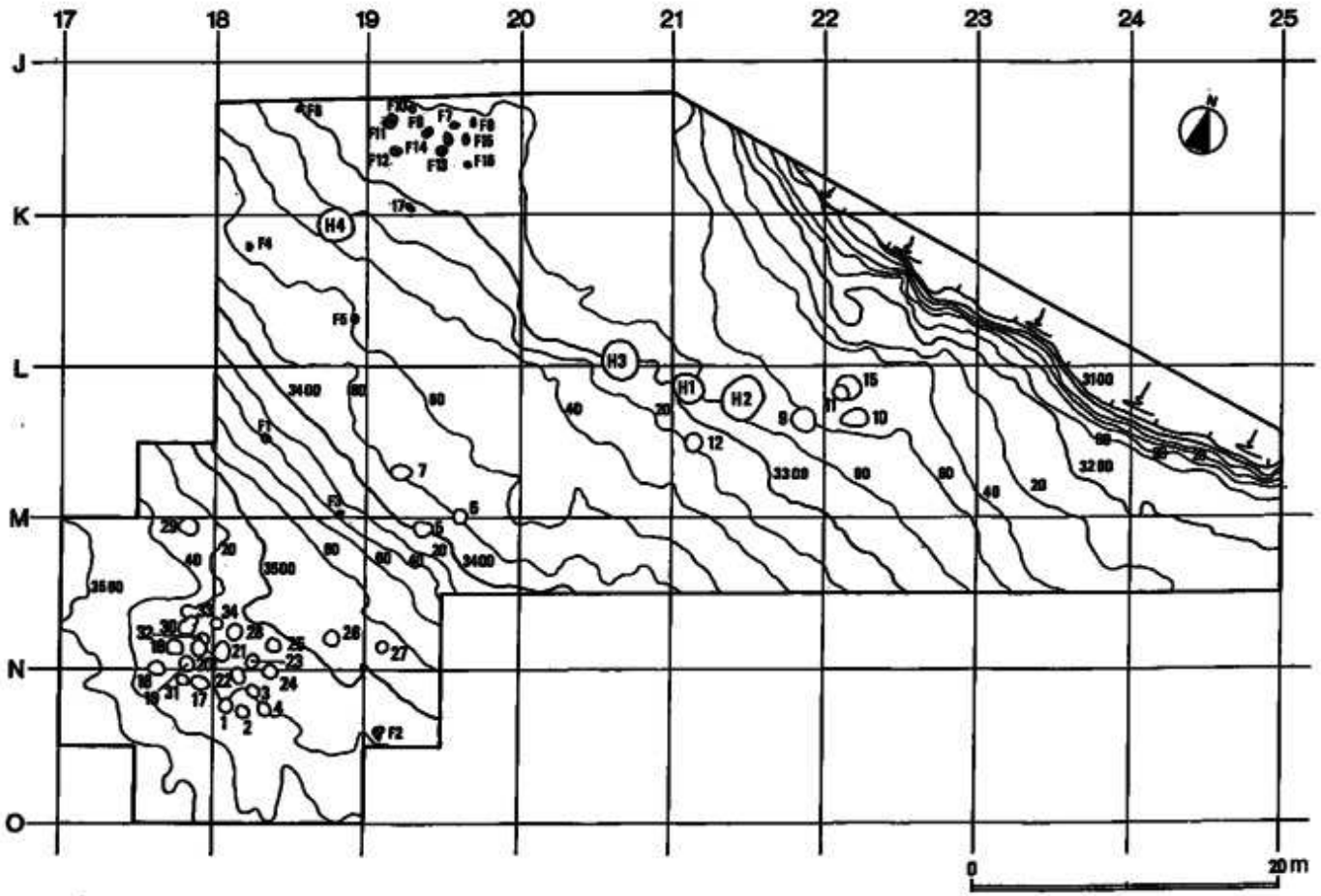
検出された遺構は竪穴住居跡4軒、土壙30基、焼土17ヵ所である。住居跡はいずれも縄文時代中期後半のモコト式土器の時期のもので、V層の黄褐色火山灰(Ta－d)まで掘り込んで構築されている。平面形は卵形あるいは円形で、径は1.5mから3mと小型である。中央に浅く堀りこまれた炉をもつものがある。H－2・3・4の床面からは土器、石器とともに黒曜石の剝片が集中して出土、ほかに炭化材や炭化したクルミなども検出された。黒曜石の剝片には接合するものがあり、礫素材の大きさや形状が推定できる。

土壙は円形、長円形、隅丸方形の3種類がある。円形の土壙はN－18区とその周辺に22基まとまって検出され、長円形のものは調査区西半の住居跡周辺に集中している。土壙内の出土遺物は少ないが、周辺の出土遺物からみてモコト式土器の時期の遺構と思われる。焼土の大半はJ－19区付近のIV層中から検出された。

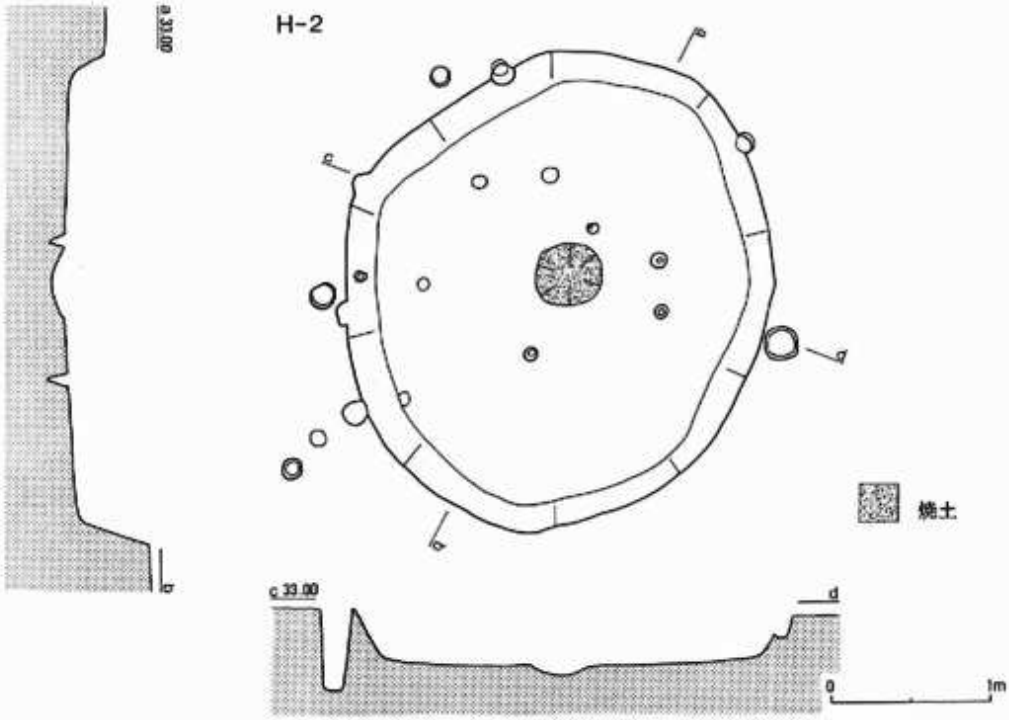
遺物は縄文時代、続縄文時代および近代～現代のものが合わせて約22,000点出土した。内訳は土器片が約8,300点、石器約250点、フレイク・チップ約13,000点、礫が約150点である。遺物の分布をみると、段丘崖縁辺のII層・IV層がとくに多い。

土器は、縄文時代早期～晩期から続縄文時代におよぶ各時期のものがある。早期の土器は東釧路III式とコッタロ式、前期では櫛歯状工具による刺突文が施されたものと押型文土器（?）、中期の土器はモコト式と北筒式、晩期では緑ヵ岡式がある。続縄文時代のものは後北式土器である。このうち最も多くを占めるものは、縄文時代中期後半のモコト式土器である。貼付帯や体部上半に指頭圧痕、縄圧痕のあるもの、半截竹管状工具や篦状工具による押引文、刺突文が施されたものがある。これらのモコト式土器は器形が復元され、施文の様子がよく分かる良好な資料である。

石器には石鏃、石槍またはナイフ、スクレイパー、石錐、楔形石器、石斧、すり石、たたき石、くぼみ石、石皿、台石など各種がある。住居跡から検出された石器類は、モコト式土器に伴う石器組成を知る上で有意義な資料と考えられる。



遺構位置図



竪穴住居跡 H-2

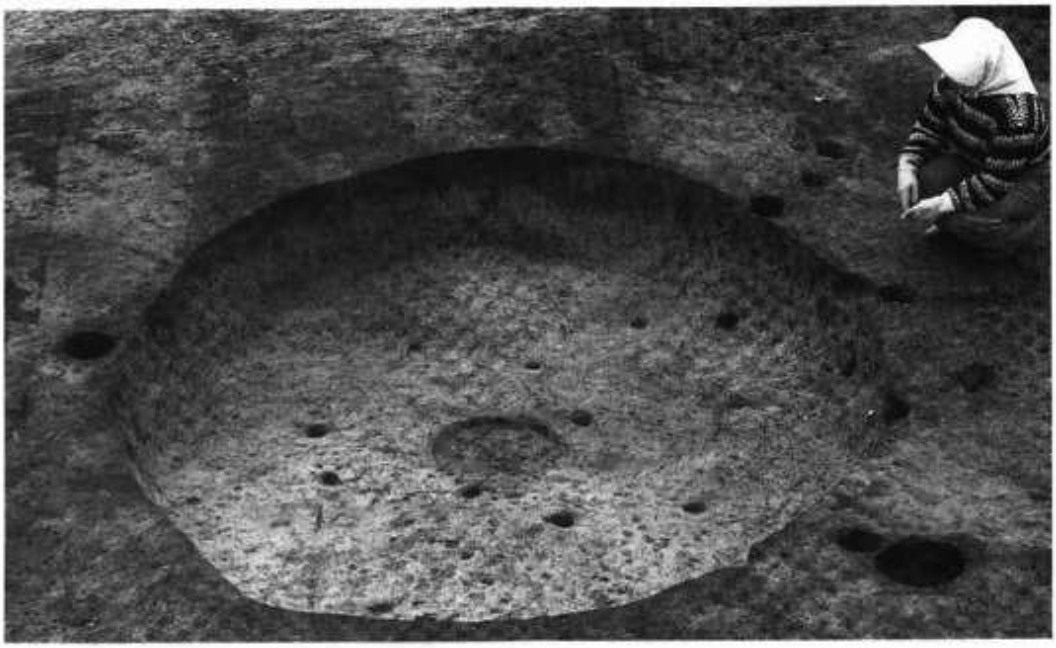
調査状況

◀ 土壙（P-10）

▲調査状況

◀ 土器出土状況（H-4）

▼竪穴住居跡（H-2）



3　研修・研究会等

(1)　研修・研究会参加

＊奈良国立文化財研究所埋蔵文化財発掘技術者研修

「石器調査課程」　葛西智義　　8月25日～9月8日

「木器調査課程」　鈴木　信　　2月4日～9日

＊日本考古学協会総会（甲府市）　　5月23・24日

発表者　田口　尚　「千歳市美々8遺跡低湿部の調査―アイヌ文化期の低湿地遺跡―」

＊埋蔵文化財写真技術研究会（奈良市）　　7月3・4日

参加者　森岡健治

＊池田町考古学セミナー（池田町）　　8月19日

講　師　西田　茂　「十勝の先史文化―十勝・池田町の古代について考える―」

＊アイヌ民俗文化財専門職員等研修会（札幌市）　　9月9日～11日

講　師　森田知忠・田口　尚

「アイヌ期の埋蔵文化財について―アイヌ期の美々8遺跡―」

＊全国埋蔵文化財法人連絡協議会研修会（伊香保町）　　9月17・18日

参加者　菅野　聡・重平　淘・磯田千秋

＊北海道考古学会発掘調査報告会（札幌市）　　12月5日

発表者　高橋和樹　「函館空港中野A・B遺跡」

＊南北海道考古学情報交換会（松前町）　　12月12・13日

発表者　越田賢一郎「七飯町国立療養所裏2遺跡」

〃　高橋和樹　「函館空港中野A・B遺跡」

〃　工藤研治　「上磯町茂別遺跡」

参加者　立川トマス・花岡正光・谷島由貴・森岡健治・中田裕香・村田　大

＊東北日本の旧石器文化を語る会（多賀城市）　　12月19・20日

参加者　山原敏朗

(2)　展覧会等協力

＊かでる2・7文化交流室展示　　5月1日～30日

「掘り出された北海道の歴史―平成3年度北海道埋蔵文化財センターの発掘調査から―」

主催　北海道立社会教育総合センター

＊熊石町歴史記念館特別展　　7月10日～8月30日

「鮎川遺跡出土瑪瑙入り土偶里帰り特別展―檜山管内の考古学資料と道南の土偶展―」

主催　熊石町教育委員会

＊第17回道民ホール文化財展　　2月22日～26日

「漁撈」　主催　北海道教育委員会

(3) 部内研修・研究会

＊発掘調査現地研修会　（於）函館市中野B遺跡　9月21・22日

「III文時代早期の集落跡」　講師　高橋和樹

「石器原材の産地について」　講師　藁科哲男氏（京都大学原子炉実験所）

＊発掘調査報告会

「遺跡調査報告」　12月3日

＊勉強会

「地質学実験講座」　講師　花岡正光　12月～3月

(4) その他

＊平成4年度文部省科学研究費奨励研究(B)

「土器から見た擦文文化期の北海道南部と東北地方北部」　中田裕香

(5) 平成3年度分追加

＊国立民族学博物館アイヌ民具研究会　3月21日

発表者　田口　尚　「千歳市美々8遺跡出土のアイヌ民具」

＊勉強会

「地形学講座」　講師　花岡正光　12月～4月

「トータルステーション実習」講師　谷島由貴　3月～4月

＊講演

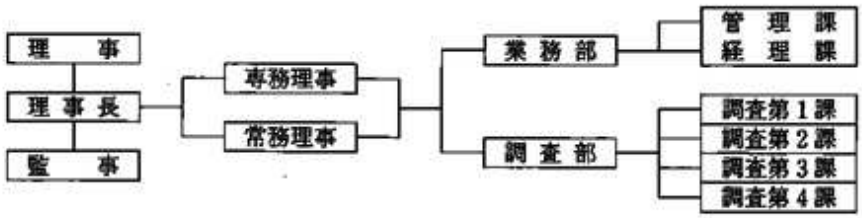
「北海道出土鉄器の分析結果と問題点」講師　赤沼英男氏（岩手県立博物館）

2月5日

4 組織と機構

役員

理事長	寺山敏保	北海道教育委員会教育長
専務理事	永田春男	北海道埋蔵文化財センター
常務理事	中村福彦	北海道教育庁生涯学習部文化課主幹
理事	大場利夫	札幌市文化財保護審議会委員
理事	峯山巌	北海道文化財保護協会顧問（平成4年9月5日死亡）
理事	藤本英夫	北海道文化財研究所長
理事	岡田宏明	北海道大学教授
理事	石林清	北海道文化財保護協会副会長
理事	佐々木雄一	北海道企画振興部長
理事	武田祐男	北海道教育庁企画管理部長
理事	小本毅	北海道教育庁生涯学習部長
監事	安達整	北海道生涯学習審議会副会長
監事	椿三佐幹	北海道副出納長兼出納局長



職員一覧

業務部

職	氏名	所属
業務部長	○伊藤庄吉	
管理課長	○井島紀雄	管理
主任	葛西宏昭	〃
嘱託	穂坂惣次郎	〃
〃	藤田忠雄	〃
〃	磯田千秋	〃
経理課長	○石橋光三	経理
主任	菅野聡	〃
〃	吉田貴和子	〃
嘱託	重平洵	〃

調査部

職	氏名	所属
調査部長	○森田知忠	
調査第1課長	鬼柳彰	第1課
主任	佐川俊一	〃
〃	○田才雅彦	〃
〃	葛西智義	〃
〃	森岡健治	〃
嘱託	鎌田望	〃
〃	藤本昌子	〃
調査第2課長	○越田賢一郎	第2課
主任	西田茂	〃
〃	立川トマス	〃
〃	熊谷仁志	〃
〃	○工藤研治	〃
文化財保護主事	○中田裕香	〃
嘱託	西脇対名夫	〃
調査第3課長	○千葉英一	第3課
主任	佐藤和雄	〃
〃	三浦正人	〃
〃	田口尚	〃
文化財保護主事	皆川洋一	〃
嘱託	越田雅司	〃
〃	鈴木信	〃
調査第4課長	○高橋和樹	第4課
主任	和泉田毅	〃
〃	遠藤香澄	〃
〃	花岡正光	〃
〃	谷島由貴	〃
文化財保護主事	○山原敏朗	〃
嘱託	村田大	〃
〃	倉橋直孝	〃

○印　道教委派遣職員

調 査 年 報 5

平成4年度

平成5年3月26日発行

編集・発行　財団法人　北海道埋蔵文化財センター
〒064 札幌市中央区南26条西11丁目
☎ (011) 561-3131

印　　刷　興国印刷株式会社
〒063 札幌市西区西町南13丁目1-40
☎ (011) 661-2221㈹